

次目號二十九第

記事

赤城シャンツエの全日本

ジャンピング競技會を観る

一九二八年度を省みて

「競走路の可及的前日發表」に就て

日高山脈の地名に就て

—特に戸蔭別川上流地方の山岳名—

積丹半島の春

春の唐松岳

草薨の葉

北海道の春

夏スキーのサイズに就て

中山スキー小屋

寫眞版

五月の群別岳

中山峠より札幌岳・狹薄岳・漁岳を見る

十勝

廣田戸七郎 (一)

中村新一郎 (六)

宮下利三 (三)

伊藤秀五郎 (六)

山口健兒 (三)

小池文雄 (三)

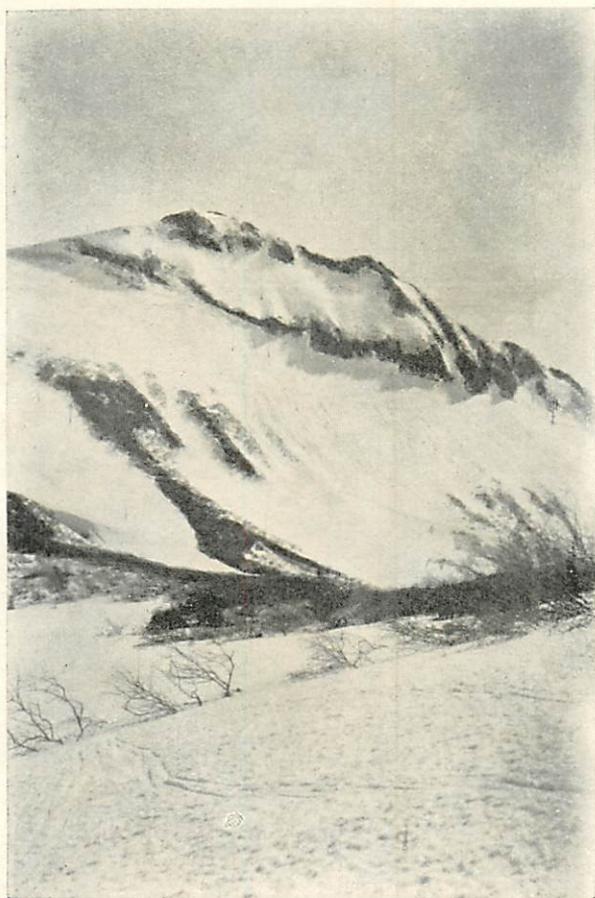
山口生 (三)

伊藤秀五郎 (四)

井出生 (四)

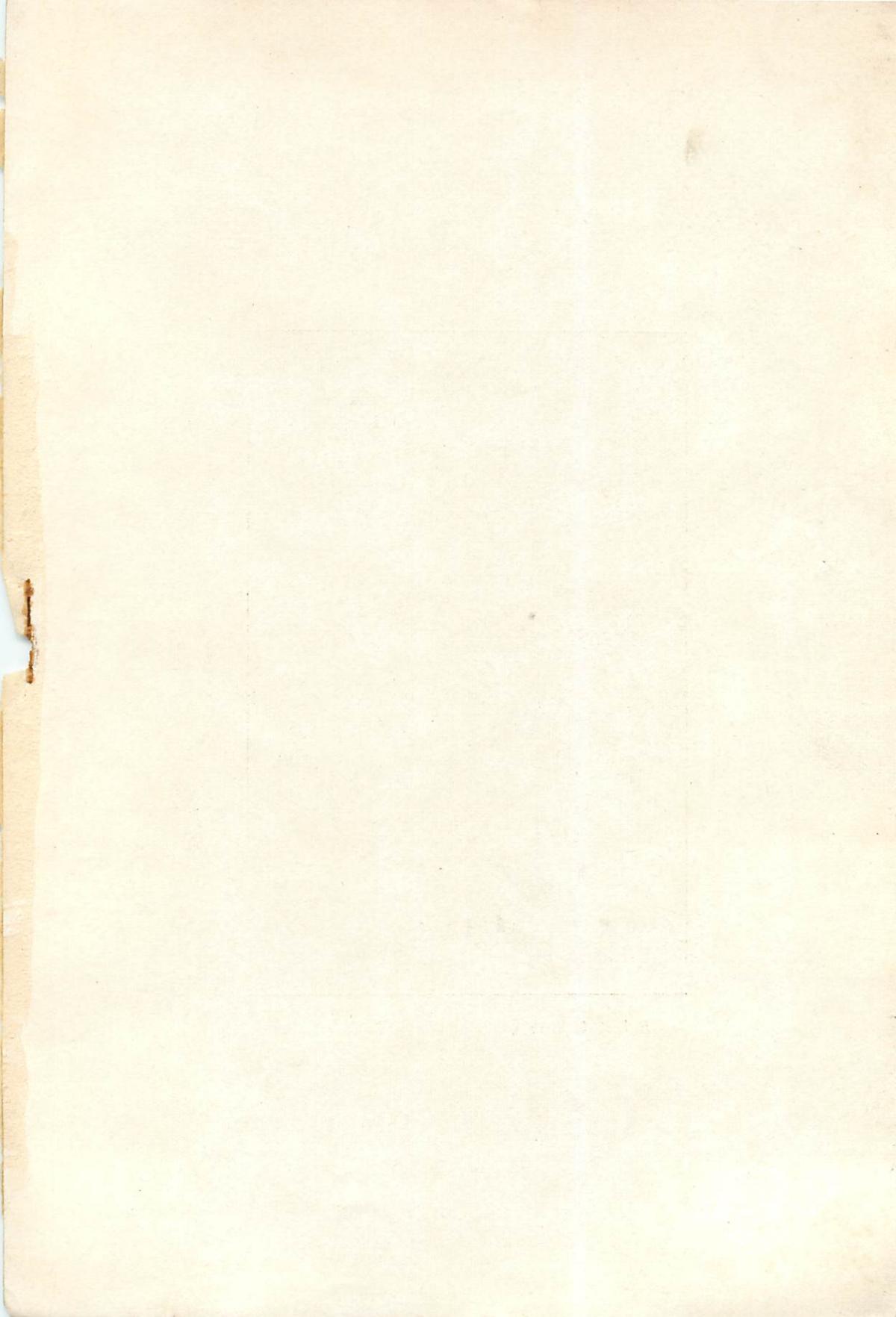
渡邊千尙 (四)

岡田次郎 (四)



五月の群別岳

渡邊千尙



赤城「シヤンツエ」の全日本 ジャムピング競技會を觀る

廣 田 戸 七 郎

「アカギヤマ」の印象

私の心の中に「アカギヤマ」といふ言葉が何となく云ふに云はれぬ親しみを持つて居た。その氣持はジャムプ臺があるとか何とかといふ事から引き離して私には此名前を聞く事、此名前を憶ひ出すことがとても嬉しいのであつた。私は中學の三年の頃越後路から徒歩で清水越えて沼田に行つて、そこから山を登つて湖水の邊りに下りた事があつたが、その頃の記憶は薄々未だ私の頭の中に残つて居た。私の憶出では眞夏であつた。大きな沼の廻はりにあの大きな赤城山の連山が肩を並べて立つて居る。そしてその山丘の此方彼方にノンビリと遊歩して居る馬の群れは、さながら一枚の畫幅となつて私の小さい頭の中に残されて居た。その清らかな、さわやかな氣持はいつまでも私の記憶の一頁に残つて居たのであつた。

私は已に中學時代からさうした良い印象を「アカギヤマ」に持つて居たので、今度自分の本職ぢやないかと間違へらるゝ位に高じて居る自分の趣味のスキのことので此山に行くことになつて、どんなに嬉しく思つたか知らない。殊にそこには日本一流のジャムピングヒルがあつて、そこへノールウエーの選手連と同行して日本の一流のジャムパー達のジャムプの競技を見學することが出来るといふのであるから、此幸福は私には例へ様がない程嬉しいものであつた。

赤城へ行つた人達は大抵知つて居る。湖水に面した處に赤城神社があつて、その側に猪谷旅館といふのがある。もう少し離れた處に青木旅館といふのがあるが、多くの登山者は此二軒の何れかに厄介になつて居る筈である。私は青木旅館の多くを知らないが猪谷旅館には今度大へん厄介になつた。去年の春オリンピックから歸つた時に猪谷氏とは東京で會つてよくお話を聞いて居た。そしてそこで長年猪谷氏がスキーのジャムブを研究して愈々今度新に世界的のジャムビングヒルを築造されたことを聞いて、私はどんなに驚嘆したか知れなかつた。そして同時に敬意を表せざるを得なかつた。

今度出掛けて目のあたりシャンツエを見て一層感服した。家のすぐ向への小さいスロープに一つのおよく整つた小規模の練習臺がある。又宿まで行く途中に三〇米位樂に飛べる手頃な練習用のジャムビングヒルがある。それにもう一つは、今年度競技會の行はれた大規模の競技用のジャムビングヒルである。その何れもよく手を入れて修繕されて居るので流石のヘルセット中尉一行も驚嘆して居た。事に猪谷一家の人達がスキージャムブに熱心さを持つて居る。猪谷氏その人が已に良い感じのする人であると同時に、猪谷氏その人を圍む一家、並びに一族の人達が皆感じの良い印象を與へてくれるのであるから恐らく一度此處を訪れた人達は、きつと又赤城へ行かうといふ氣になると思ふ。赤城山の自然と人情がきつとさうさせることを私は信ずる。

今度の赤城山大シャンツエ建設には縣廳の學務部長岡本さんのとても大した應援と努力とが投げ込んであることも到底忘れることの出来ないものである。

私はあれだけの大ジャムビングヒルを作つて下さつた事を日本スキー界の爲に非常に嬉しく思ふ。そして心からの感謝の意を表すると同時にあれが充分多くの日本のスキー家達に活用されることを冀ふものである。

競技會の價値

出場人数が十九名と云へば、何んだそんな小人数のスキー競技會かと、兎角表題位に眼を通して中味が忘れられ易いの

は仕方がない事であらうと私は思ふが、然し今度の赤城山のスキージャムピング競技會だけは、日本中での本當の一流の集りであつたし、ジャムピングヒルの規模と云ひ、手入れと云ひ全く行き届いて居た點で蓋し今シーズン中彼處此處に於て開催せられたスキー競技會、特にジャムブ競技會での最良の質を持つたものと云ふことが出来る。私達オリンピック仲間も外國へ行つてさへ、嘗てあれ程修理の行き届いたジャムピングヒルでジャムブの競技會の行はれたのを見なかつた。ヘルセット中尉も、これこそお世辭でもなければ虚飾の言葉でもない本當の氣持で、「世界中で最も良く修理されたジャムピングヒルの一つだ」といふ折紙をつけられた位であつたし、又 Herr Kollerid 及 Herr Suensid も嘗てこんな立派な、よく手の入れてあるジャムピングヒルでジャムブをしたことがないと云つて居る位であつた。此折紙があつた事と少數とは云へ選抜された日本一流のジャムバアの集りであつたといふことだけで、已に今日のジャムブ競技會は我が國での模範的競技會となり得る價値を充分持つて居た。

ジャムバア達の技術

集つたジャムバア達は樺太、北大、信越、早大の一流處で、先づ全國選拔選手と見てよいメンバーであつたことは已に書いたが、その何れの選手達も非常に大きな研究的態度を持ち、そして燃ゆる様な熱と力とを持つて非常に勇敢に特に力強い踏み切りを以つて飛躍をした所に今日のジャムブ大會が一層光彩を放つて居たと思ふ。今日のジャムブを見てヘルセット中尉は云つた。「自分が日本に來て特に力を入れて教へたジャムピングヒルの修理と、ジャムブの技術の内が一番大切な力強い踏み切り方法とが、今日の競技會で自分に満足を與へる程もう進んでくれた事は心から嬉しく思ふ。風が少々あつた爲に自分の仲間は五十五米の記録を出すことは出来なかつたことは甚だ残念ではあるが、天候さへ良ければ五十五米迄は必ず出せたであらう」とジャムピングヒルに更に一枚の箔をつけてくれた。天候の不良は兎も角として私は前記の二つの進境で充分満足したと微笑を浮べて語つて呉れたが、それは本當に中尉の心からの叫びであつた。その言葉程にジ

ヤムバアの技術的進境を認めることが出来た。記録を見ても判る様に三〇米以下の飛躍者が一人もなかつた事は技術の進境の一端を知ることが出来る。恐らく當日出場の人達は自分の今迄に有するレコードを皆破つて居られたことであらう。簡単に當日の競技者を評するならば、當日の第一人者神澤君は最長不倒四二・五米を飛んで此赤城ジャンツエでの Official の競技會記録を造つて居る。

此日のジャムプで榮えを見せて斷然良い *Form* で飛んで居たのは植地君（北大）と淺野君（樺太）であつた。二人共一回轉倒した爲に良い成績をとることは出来なかつたが、フライトで問題の *Volts* のあつた事は牧田君やその他の一流處を遙かに抜いて居た。牧田君が第一位を得たことは同君自身の体の均整とスキ一の操法が大いに助けて居たと思ふ。伸びのある体が凡べてを美しく見せて居た *Volts* の有無を云ふならば未だ足りないと思ふ。恐らく此事は牧田君自身も判つて居ると思ふ。といふのは二回共空中で前傾をとる爲に可成努力をして居た。体は上下によく伸びをとつて居たけれど前方へのかかり方は未だ未だ研究の餘地があつたと思ふ。概して他の人達もそう見えたが、前方にかかり方の少い事は踏み切りの方法が未だノールウエーの人達がコーチして呉れた點を充分究めることが出来ない爲ではなかつたかと思はれる。伴君は札幌のインターカレッジの時の様に美しい *Form* で飛んで居た。飯山や高田の時はすっかり調子が狂つて居た様であつた。

此日もう一つ榮えて見えたのは村本君であつた。同君のジャムプ技術は今迄に見た内で一番美しく力強く飛んで居た。一本目の轉倒が彼に禍したことは惜しいことであつたが、恐らく同君は競技會で今日程思ひ切つて精一杯飛んだと思つたことがない位に元氣よく飛んで居た様に私には見えた。

今日の競技會で着陸してから前方に轉けこんで居た人があつたが、それはスキ一の滑りが悪い爲であるか、それとも着陸にスキ一の角付けがあつた爲と思ふ。

猪谷氏が番外で一本飛ばれたが、スキ一の操法と空中での体の前傾は他の人達に優るとも劣る處がないと思つた。尙氏

の空中に於ける後半の部分の体のコナシは抜群と云つてよからう。日本の一流ジャムバア達で未だ氏程後半の体のコナシの巧みな人を私は見たことがない。ヘルセツト中尉も大へん体のコナシ、伸び、スキーの操作の良いのに感嘆の聲を發して居た。そして Norway の Alle Klasse の競技に同氏を送つたならきつと入賞するであらうと云つて居た。同氏が今日數年來殆んど獨創でやつて居たジャムバア技術を多くの日本一流のジャムバア達に見せて呉れたことは非常に他の人達に裨益した處が多かつたと私は信ずることが出来る。

終りに前にも書いたが若しも當日風と少しの降雪が競技を邪魔しなかつたならば、恐らく競技者達はもつと美しいジャムバが出來たであらうし、又私共も見ることが出來たと思ふ。この事は誠に遺憾に堪へなかつた。

私は最後にあのシャンツエを生かすといふだけのことばかりでなく、日本のスキージャムバア競技を進歩發達させる意味で毎年今度の様な競技會をすつと開催せられんことを。

私達のスキーの言葉 シーハイル!!

一九二八年度を省みて

中 村 新 一 郎

吾がスキー界にとつて革新期とも云はるべき一九二八年度は多くの期待を以て迎へられ、そして幾多の効果を残して溶雪と共に過ぎて行つた。

より良き効果を收めんものと額に汗して盤溪峠や、十二軒澤を登り下りし始めたのは九月も未だ下旬にならんとする頃だつた。時には單獨で、又時には同志と一緒に走り廻つた。木の葉の黄に紅に彩られたのも束の間で、やがて手稻、三段の山々に雲頭の崩れた黒雲が懸り北より西の風が吹き荒み出すと、今までの黄葉、紅葉は枝より離れて谷間に舞ひ、又は凍つた坂路に舞ひ散つた。峠を走るのも寒むさと共に次第次に怠つて二日に一度、三日に一度になつて來た。

雪の遅いのを嘆いた、そして降雪の一日も早からん事を

祈つた。そして積雪を待つた。

十二月に入つて始めて雪の上で練習し得る様になつた。毎日歸朝選手よりワックス及び走法のテクニクに就いて指導を受けた。

青山温泉の冬期合宿まで毎朝六時頃から起きて平地滑走の練習をした。朝食前の三十分間の平地滑走は樂な仕事ではなかつた。然し終つた後の気分は何とも言へなかつた。その内に幸か不幸か學校にあんな騒動の起つたため練習の時間は非常に豊富に持つ事を得た。そしてこれらの練習時間はより良きワックスと走法のテクニクを見出さんとして費された。然しその結果は得た所のものは何もなかつたと云つても良い位であつた。

一方インターカレッジは一月の中旬に迫つて來た。

その内に吾がスキー部の年中行事の一つたる青山温泉の楽しい合宿が始まつた。

楽しい合宿も良天候に恵まれた日は一日か二日位のものであつたらう。そして吾々は一週間の合宿を半分は練習に他の半分は登山にと豫定したが、然し登山は岩雄に行つたのみであつた。それも吹雪のため切角の所で歸つてしまつた。練習は矢張りワックステクニクと走法のテイクニクに重きを置いた。然し今になつて考へて見るに合宿中の練習はもつと實の入つた練習であれば良かったと思はれる。然し心行くまでの練習はせなかつたが、それでも楽しい一週間の合宿生活も過ぎた。そして皆んなと共に多少なりと新しいワックスと走法のテイクニクを了解する事を得た。歸札後デイスタンスの連中は毎日暮れの街の忙しさも何處へやら、圓山グラウンドに集つて相變らずワックスと走法に就て研究して居た。

インターカレージは愈々迫つて來た。東京からは早や二三の大學がやつて來て合宿を始めて居る。戦鬪気分はいやが上にも旺盛になつて來た。

やがて新春來たり世の人々の未だ屠蘇の酒に酔ひ知れて

居るを他に見て吾々は二手に分れて圓山に合宿を始め最後の練習に取りかかつた。

此の合宿中は十數年以來の大雪に見舞はれ、コースつけに一日、二日を費した事さえあつた。

來る來ると云ふて居たノールウエスキー選手ヘルセツト中尉以下二名は遂にやつて來た。

今までは寫真でだけしか見た事もなかつたノールウエー一流選手の美事なジャムブも見た、美事な走法や又色々のテイクニクも目のあたり見る事を得た。

毎日三角山でコーチが行はれた。競技會も何處へやら美事なジャムブ見たさに毎日三角山に行つて見た。

競技會は終ひにやつて來た。一月十二日から三日間に渡つて三角山で盛大に行はれた。

第一日 四十軒には山田、宮下、安孫子、片山の四君が入賞した。四十軒と云へば十里、その十里の雪路を我れ等が選手は一人の落伍、棄權もなく走り續けて呉れた。あの雪の降る中を、ともすれば消えんとするコースを辿つて、汗にまみれて苦闘された。あの時を思ふとそとろ涙ぐましきを覺えるのである。

第二日 十八軒に中村、奥井、宮本の三君が入賞した。

当日は天気も良く一同前日程に苦闘はしなかつた。複合競技には神澤、杉村、宮村、村本の四君が入賞した。

第三日 ジャンプに伴、神澤、村本、杉村、宮村の諸君健闘よく六名の入賞者中吾々選手により五名までも占めた事は如何に吾が部はジャンプに強く又多くの優秀なるジャンパーが存在するかを示すものである。

午後三十二軒リレーが行はれた。思へば昨年阿闍羅山下に万斛の涙を飲んで敗れたその仇は見事に報ゆる事が出来た。そしてそれと共に多年吾々の懸案であるリレー優勝の目的は遂に吾々に依つて達せられたのである。最後の走者長田君が無事にゴールに入つた時は涙が出る位嬉しかつた。

三日に渡つたインターカレージも吾々の手に大勝利が歸すると共に終つた。勝利の喜び、あの時の喜びは今だに忘れ得られない。吾々は永久に勝利の歡喜を奪はれぬ様に努めなければならぬ。

雪の北海道に昨年宮様が來られた。而かも秩父宮殿下が來られた。如何に殿下がスポーツに御熱心で特にスキーを

御愛好遊ばされるかは、吾々は充分に知り盡して居る。然して又殿下にはスキー登山に如何に優秀なる技術を御持ち遊ばされて居るかと云ふ事を目のあたり拜觀して驚嘆に堪えなかつた。然し又宮様は一方吾々に對して如何に御仁慈に富ませられ、且又平民的に在らせられるかは申し上ぐべきを知らぬ位であつた。そして吾々の宮様に對する敬慕の念新たにして又御尊影未だ目のあたりなるに今年は又御弟宮高松宮様を一月八日再び雪の札幌に御迎えするの光榮に浴したのである。然して翌日北海道スキー選手權大會の日にあつてスキーを召した殿下を三角山なる會場に御迎へ申したのであつた。

一月十九日、二十日の兩日三角山に於て北海道スキー選手權大會が開催せられた。年々ともすれば思はぬ悪天候に惱まされる此の大會は兩日も幸ひ稀に見る良天候に恵まれた。

第一日の四十軒に吾が校選手より中村入選し、午後の複合競技には長田、山田の二君が入選した。二日目のジャンプには關君が唯一人入選したのみであつた。インターカレージの終つた後でもあらうが、此の大會に吾が校選手の意

氣上らざりしを惜むものである。多大の優秀なる部員を有する吾がスキー部にては年々此の大會により多くの選手を出場せしめ吾が校のため、北海道スキー界のため、廣くは日本スキー界のために活躍せられん事を望むのである。

又、高松宮殿下に於かせられては三角山附近に新たにヘルセット中尉により築造せられたるジャンツエに於てノールウエー選手及び吾が校選手のジャンプを御臺覽遊ばされた。繼いで先年は御兄君の御泊にならせられた手稻山バラダイスヒュツテに御出になり、又御兄君御建設の空沼小屋に御出遊ばされ、恐多くも雪の空沼岳、狭薄岳等にシユプトルを印せられたのであつた。

一方吾が校選手は高田に於ける全日本スキー選手權大會に出場せんため一月二十四日一同は勝利を期して嚴冬の朝まだき札幌を出發した。途中津輕の海も恙なく二十四日夕刻無事に高田に着した。

好奇と物珍らしさに明日からの練習を楽しみて一夜を過すも翌日早くも宿舍よりスロープまでの遠距離を喚つて宿を移し、移つては宿の待遇の悪きを憤激しつゝも、二三日は過て行つた。又時には雨雪に一日を閑過し、トランプ、

碁盤を前にして半日を經過した様な事もあつた。

日の立つのは早やかつた。コースの巡廻は不充份であり又雪質に對するワックスも充分研究されてなかつた。あわてふためく内に大會當日はやつて來た。運の悪い時には悪いもので前日來の積雪約三尺餘、然かも太陽はいつの間にもやら雲間を出で、四十軒のスタートする頃には高田特有の濡雪に變つて居た。

高田に於て我々は略三状態の雪質を経験した。雨後のガラメ雪、降雪中の粉雪(然し多少水分を含む)降雪後の濡雪、然も當日は最も苦手の第三の場合の濡雪に出會した。競技會の様様はすでに御承知の筈である。

あの悪コンデイションにも負けず苦闘して四十軒及十八軒に入賞して呉れた宮下、奥井の二君は吾が校スキー部のため感謝に堪えない。翌日のジャンプには村本、宮村の二君が入賞され、又複合競技には神澤、長田の二君により第一位及び第二位を占める事を得たのは、せめてもの喜びであつた。又最後に之だけはと思つて居たリレーにも破れた。

勝利の喜びを心に書き、時にはワックスの効果の意外に

良好なるに心秘かに喜び、又時には思はぬ失敗に淡き失望を抱き、憂嬉こもくくなりし大會も遂に豫期せざりし結果と、それに對する復讐の念とを殘して過去つた。

競技會の終つた晩、去り難き雪の高田に盡きざる怨を殘してデイスタンスの連中はジャンパーに分れて東京に向つた。そして一日の休樂を東京に得て翌日上野を立つて札幌に向つた。

歸つて見れば春尙何處、冬も最中であつた。良雪を求めて今日は藻岩、明日は手稻と三日四日は瞬く間に過去つた。二月十日に吾が部年中行事の一なる手稻山下降レースが行はれた。一日の快を得るには充分な催しであつた。雪は良し天氣は良し、此の催しを始めて以來三年、一年に約五分づゝのタイムの短縮をなして今年は宮本君によつて十七分の好記録が作られた。

又二月十八日には三角山に於て吾が部校内大會が催された。一日寒むい風が吹いて居たが無事に然かも好記録を殘して大會は終了した。吾が部のスキー大會に於て一競技に僅か五六人より七八人の出場者しか無かつた事は残念に思はれたもつと大勢の部員が出場し、より盛大に此の大會の

行はれん事を期望する。

又此の間、一方關東赤城山に於てジャンプ大會が行はれ續いて秩父、高松兩宮殿下御臺覽のジャンプが行はれ、ノールウエー選手と共に吾が部選手の活躍により驚くべき好記録と、そして又吾が國スキージャンピングの進境著しきを示したのであつた。

かくて今シーズンの重なる大會も盡く終つた。

此の間ノールウエー三選手は各スキー地を巡つてスキー技術の發達及布及に努力を續けて呉れた。

やがて何時しか試験となつた。そして又それと共に吾々仲間の別れる時もやつてきた。

かくて雪の山野を馳驅し、一致協力して勝利の榮譽を共にした幾多の友も、さゝやかな別れの宴を後にして北に南に別れて行つた。

試験終了後の春の休みは昨年例にならつて手稻バラダイスヒユツテで楽しい春期選手合宿を始めた。

競技に追はれて暫らく顔を出さなかつた間にヒユツテは少なからず荒廢して居た。然しさしも荒れたるヒユツテも吾々の二日の努力に依つて全く美しくなつた。然し不幸に

も暫らくの間良い雪に恵れなかつた。三日目に滑らぬ雪を我慢して宇都宮君に連れられて一同迷澤山に行つて来た。翌日から雨が降つた、そしてその雨の中をバラダイスまでシャンツェを作りに行つた。よく風も引かずに済んだものだ。

それから毎日朝の食事を終ると一同シャンツェに出掛けて飛んだ。合宿中食事の世話をして下れた後藤、中山の兩君には感謝する。廿八日に残念ながら一同に別れて一度歸省する事にして下つた。そしてその晩の汽車で札幌を立つた。

四月の五日に札幌に歸つて来た。例年なら街は乾いて居る筈だ、今年は全く雪に恵れて四月に入つても平地に未だ雪があつた。

四月六日大野部長及び中野先輩の御供をして貝沼、山田奥井〇諸君と共に空沼小屋に出掛けた。そして天候に恵れた五日間の楽しいシーライゼをした。

二日目 珍らしく良い天氣であつた。朝陽に輝やく樹木の下を沼空岳に登り飽く無き四方の眺望を收めて、次に空沼峠に行き春風に吹かれて樽前の噴煙、支笏湖の碧水、此

の最閑な眺めの中に暫し樂しき時をうつして歸つて来た。

三日目 昨日に比して少々風は冷めたく感じたが、札幌岳を越えて豊平川上流の河畔に出た頃は又暖い閑な春の漸く夕刻にならんとする頃であつた。此處で中野先輩に別れて薄別に向つた。一緒に愉快な山行をして途中で別れる時は一種云ふ事の出来ない淋しさを覺ゆるものであつた。

四日目 中山峠を越して凍雪に足の裏を痛くさせながら夕刻山岳會の中山ヒユツテに到着した。

五日目 昨夜來の降雪にて約三、四寸積つた水分を含んだ重い雪だつた。九時過ヒユツテを後に定山溪に向つた。中山驛より濕雪と霧に惱まされつゝ、喜茂別岳を越え無意根、並川の鞍部までは五里霧中の態であつた。白水澤を下つて定山溪の終列車に辛うじて間に合つた。

二日許り休養後手稻バラダイスヒユツテに出掛けた。春のヒユツテンレーベンは吾々シローイフアーにとつては忘れる事の出来ぬ快樂である。愉快な二、三日は夢の様に過て行つた。

此の間中野先輩は任地三重縣指して旅立たれた。ヒユツテに居た一同は一晚を札幌に下つて同氏を見送つた。

十八日より貝沼氏等と共に一行四人バラダイスヒユツテよりヘルベチャヒユツテに出た。途中山田氏がスキーを折り万斛の怨を余市岳に残して翌日一人で錢函指して下つて行つた。思へば彼も過去二年間吾々と共に奮闘し續けて呉れた勇士の一人である。彼と此の朝里、余市に於ける最後のスキー行を共にせざりし事に一入淋しさを感ぜられた。然し残りし三人は朝里、余市を駈巡つて又春の一日を楽しく山に過して來た。翌日再び手稻に出て荷物をまとめて夕刻ヒユツテを後に輕川に下つた。

一週間を経過して五月七日、同輩一行七人は春の空沼小屋へと出掛た。湯の澤までの泥路に殆んど疲れ果て、それから調子外れの短いゾンメルで頭を振り小屋に着いたのは四時過ぎであつた。

翌日は朝から霧だ、雪は大部溶けて居た。沼の氷に穴をあけて魚釣りに半日を過した。夕方、宮下、武野の二君と空沼岳に登つて來た。

翌日は朝から風が強く、雪は硬く凍つて居た。宮下、宮村、武野の三氏は簾舞に下つて行つた。残つた一行四人は漁岳に出掛けた。平地では早や櫻花も開かんとするに此の

日の山は硬く凍つて居た。風は強かつたが然し空はよく晴れて居た。そして凍雪にゾンメルシーは充分に偉力を發揮する事が出來た。

その翌日四日間の楽しいヒユツテンレーベンを終て簾舞に下り札幌に歸つた。

何時が今シーズンの最後のスキー行になるだらうか。

山々には未だ未だ雪が残つて居る。

競技をなす者はそのシーズンの競技會が終るまでは心からのびくと楽しいスキーをやる機會は殆ど無い位だ。せめて春の残雪を追ふても楽しむためのスキーを心行くまで樂しみたいものだ。

吾々シーロイファーにとつて愉快な思出を残す時は何時の間にやら過去つて、又學課に追はれる時がやつて來た。然し山々には未だく雪が残つて居る。

(一九二九・五四)

競走路の可及的前日發表に就いて

宮 下 利 三

ラングラウの進歩と共に、年々コースの選擇に關して競技當事者が非常に頭を使つて居られる様子が深刻に見えて來た事は争はれない事實であると思ふ。同じ土地で毎年同じコースばかりを走つて居たのでは、そのコースには強くなるには相違ないが、テクニクその者の進歩からは決して感心したものではない。「地元」に強く地方に弱い選手」の聲を聞く吾が國の現状は誠にその最も惡き影響の一面を語るものではあるまいか。而もかゝる結果をもたらした直接の原因は何であつたらうか？

その數多の原因の中で私の目を惹くものは、そのトレーニングの惡かつた事である。けれども、その惡い（否より惡い）トレーニングを敢て行はしめて居た最も大きい力は何であつたらうか？ 夫處迄考へて行くと私は「競走路發

表の方法」が今迄誤つて居つたからではないかと思はれるのである。シーズンの始めに當つて既に走路が定まつてしまふ。而も年々大同小異の儘で。然る時に競技者の採る練習方法は、そのスースにへばりついて、 $A - B$ を \times 分 \times 秒、 $B - C$ を \times 分 \times 秒と計算して段々そのタイムを短縮して行く事が先づその最も重要な部分をなす事になり、平地の練習、勾配による登行法の變化、滑降の方法等の派生的、或は基本的な方面は何うしてもネグレクトされ勝ちとなつて仕舞ふだらう。斯うして少くも前シーズン迄は此の如き「試合のための練習」によつて多くの選手が試合に臨まれた様に見られて居た——而もその結果は「地元」に強く地方では思はしくない」と云ふ結果を多くの選手に就いて知つたのである——勿論之には此の外に地理的、氣候的な

諸原因を無視するものではないが。

夫ばかりではない。「此のコースは走つてあるから」と云ふ單なる經驗が先入因子となつて大きい自信を有するに反し「此のコースは走つて居ない」と云ふ丈の事實で始めから「走れない」ものゝ如く獨り定めにしてゐた悪習が手傳つて居る様な人も往々見受けられた。

此等の事實に依つて私は前述の原因を、在來の競技規定の欠陥の中に認めるに至つたのである。

かゝる時、恰も新規約が生れて、競走路の發表は競技會の可及的前日にする旨に決つた。

私は此の規約の成立によつて從來の悪い型を脱した練習方法が營まれる事を期待して居つた。

然し、問題は決して斯く簡單では無かつた。

競走路を可及的前日に發表する直接の理由としては色々な利點が擧げられて居る。曰く地理的ハンディキャップの除去、曰く競走路の欠損防止、等々を數へることが出来るであらう。

先づインターカレツデエートから例を取らふ。

此の時は當然新規定の採用があつた時であつた。此の時

のコースの決定は試合前數日であつた。若も此の場合に前日に決定したと假定したならば、如何なるコースを選んだとしても、北海道の人々がより有利で他のカレツデはより不利な地理的ハンディキャップを附されたに相違ない。何故ならばコースを決定するのが選手側であつたから。この點では多小例外的な大會とも見られる。それで各チームの提議で、一週間前にほど決定を見たことは、北海道以外のより不利であるチームを、より有利にしたと云ふ可きで、可及的前日の可及的の意味が比較的に徹底して居たと見る事が出来た。その十八キロのコースを見ても、四十キロのコースを見ても、始めて採用した部分が相當多く、コースその者では比較的齊一の條件で皆が走り得た思に様はれた。この場合のコース發表を「前日發表」でないから本年度のルールに従つたものではないと云ふ意見で——而も夫が當然であつたかの如く解してゐる——居られた人も多少ある様に聞いてゐる。けれども規約その者は決して「前日」とは云はない。可及的と云ふ字の附いてゐることを念頭に置いて考へる必要があると思ふ。

二日前に發表することより一週間前に發表した方が（一

週間前は餘り早過ぎると思ふが、より合目的な場合には——例へば、會の設備や役員等の關係で、何ふしても前日發表では完全を期し難く、従つて早く發表して、コース設備その他に手を省こうとする様な場合（インターカレッヂの様に）或は又、より早く發表した方が事實上地理的のハンデイヤップを少くする様な場合（高田の様な場合）永い間使用したコースを其の儘採用する様な時等——可及的の範圍を擴張して一週間前に發表すると云ふ様なことは必ずしも當を失したものと云はれない。インターカレッヂの場合は夫故新規約善用の例として擧げることが出来ると思ふ。

次に私は全日本の大會を願やう。

此の場合にはコースの發表が二日前であつた。可及的前日の理想に近い二日前の發表であるから一見却て良い日に發表された様に思はれる。然り發表日その者は誠に良い日であつた。然し發表の内容は何ふであつたらう？

事實は遺憾乍ら次の如くであつた。

「シャンツェから儀明」へのコースは數日前に既にヘルセツト中尉によつて「赤い布」で示された。地元の選手は青

田から後谷へ入つて、七曲りを通るコースを走つてゐた。然も此のコースは既に幾回も競技會に使用されたものである。吾々もコースの付いてゐる儘に其處を走つて見た。吾々ばかりではない樺太その他の人々も要するに凡ての人々が此のコースを走つてゐる。

然し今年は新規約の採用に依つてコースも當然變つて來なければならぬだらうと思つてゐる矢先であるので、前年乃至は豫選の時に發表された通りのコースには信を有つて走る氣はしなかつた。夫程前々日に發表される可きコースに關心を有してゐた。——部分的には赤旗の指票に依つて夫以前に判つた箇所は相當あつたが。

發表の結果は。地元選手の練習通りであり、その大半は——殊に十八キロは——前の豫選會、乃至は前年のコースと餘り異らないものであつた。前日發表のコースは實は數週前であり、乃至は一年前發表と何等變らないかに疑はれたのである。

地理的ハンデイヤップを無視した事は單に此ればかりではなかつた。

前日發表である以上多くの人々はそのコースを當日始め

て通るのが普通である。そのためには何うしてもコースを明示するための赤旗（布）が必要である。旗を探さなければ判らない様では吹雪その他の故障でコースが判然しない時には走り様が無い。この事は從來の様に早くから發表して皆が全コースを踏んで居れば旗の数が例へ少くとも見當は着くが、始めてのコースが指導票たる赤布なり赤旗（赤とは限らないが、色布であれば勿論何でも良い）に不足してゐたならば競技者全体が困惑しなければならぬ。で競技者が一本の旗の所に立つて後と前の旗が判然と見得る程度に距離に旗を立てるべきであると思ふ。此は何も私が喋々する迄もない事ではあるけれども、此の最も簡單な一事が、簡單なるが故に、又相當繁雜な仕事であるが故に、或は人手の不足なるが故に、不注意され勝となるのは止むを得ない所であるかも知れないが、夫が爲に若し競技者に自由を掛けるとしたなら夫は決して小さい問題ではない。

今シーズンに於て、或地方の豫選と、全日本の大會當日に旗不足のための悲劇が演ぜられた事に依つて私は將來に向つて此の方面の注意を充分喚起して置きたいと思ふ。而も標旗の不足が地理的ハンディキャツプを地方選手に與へ

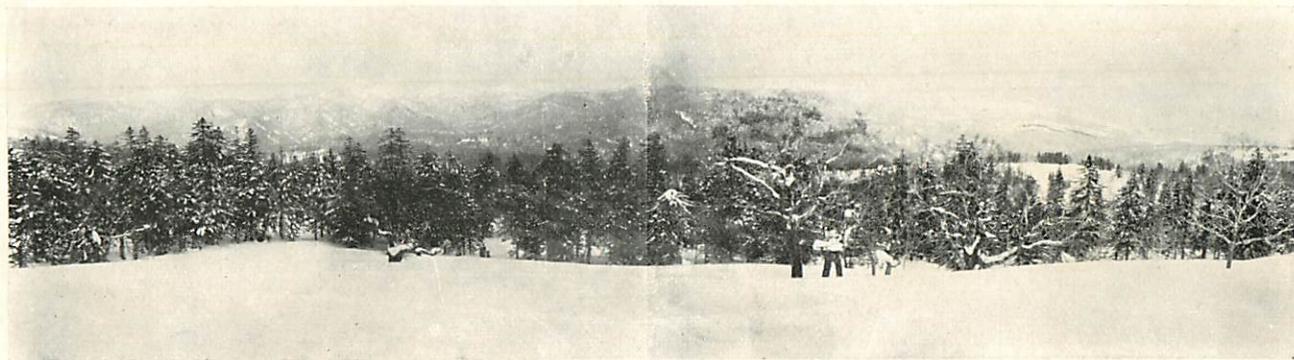
る様な場合に於て特に然りとする。地圖丈では説明の付かない様な所には詳細な標旗を數多く附すべきである。

以上に於て規定の運用の二つの相異つた場合を述べた次第である。

× ×

今吾が國の競技會の組織の現状を考へて見ると、却々前日にコースを發表して當日朝早くからコースを付けて、會を行ふと云ふ場合に萬端行き届いた所までは進んで來て居ない様に感ずる。殊にコースを付ける際には何うしても二三の特殊の人にその大部分の「實地コース付け」を依頼しなければならぬ様な所では殊に然りである。旗を多く付ける等と云ふ問題も、要するに會のオーガニゼーションがより一層整はなければ至難の事たるを免れまいと思ふ。

コースの發表が前日か、出來るならば競技の直前と云ふ様な事は誠に望ましい事である。然も現實の問題として骨抜の前日發表よりは、可及的前日に發表する事によつて方を期し得たら夫に起した事はないと思ふ。規約そのもの精神を眞に運用するには競技會の主催者側が、コースの選定、コースの發表、コースの設備に就いて、より一層大



中山峠より札幌岳・狭薄岳・漁岳を見る

岡田次郎

きい注意を以て望まれん事を希望する次第である。
未だ〳〵過渡期に彷徨してゐる吾がスキー界の事である
から私の考へにも随分誤つたもの、或は非進歩的な分子が

含まれてゐるかも知れない。夫等に就て大方の吐正を乞ふ
次第である。

夕
と
夜

小
崎
弘
郎

蠟燭は燃えつきたるらしランタンの其處と覺しく雲母光れり
山深しうつゝ心にいばりする人の姿の寂しくもあるかな
天幕ゆふと仰ぎたる兩眼に夜半の星々黒き青空
峠をば上りつめたり闇の中の遠き彼方に町の灯の見ゆ
粟を喰す家族の中にひらきたる旅の途中の飯盆の飯
夕暮れなつと動くもの見出しぬ二匹の栗鼠は草に隠れぬ
星光のいよまさりぬ青空の夕べ冷き原に出てたり
米を磨ぐ水をつめたき流れたる粒粒白く底に静みぬ
上りたる煙はうれし友と火とたきぎとるわれ秋の天幕
ゆくりなく造材小屋を見出しぬ急がぬ旅なり一夜あかさむ
生木をばくべたり足を暖めぬ薬をつみたる背のぬくとさ

日高山脈の地名について

特に戸蔦別川上流地方の山岳名

伊 藤 秀 五 郎

日高山脈の山名に就いては、陸地測量部の地形圖には不穩當と思はれるものや書落されてゐるものなどがあつたりして、不便の點がかなり多い、それで「山とスキー」第五十三號和辻廣樹君の「美生川より日高山脈へ」といふ紀行文の後に、當時の私見を一寸書き加へて置いた。それ以來私達の仲間では、大体それに基いた呼稱を用ひて來てゐるが、それとても不備の點が多いので、いつか正確な知識を得たいと思つてゐた。幸ひ本年一月初旬日高山脈戸蔦川上流の山々を登つた時に案内とした十勝國芽室村の舊土人水本文太郎の舊い記憶を尋ね、一行のもので相談した結果、粗確定的なものを得たから、それをこゝに書いて前文の訂正をして置く。これは現在最も正確妥當と考へられるもの

であるが、これも全く水本のお蔭である。彼は嘗て、數十年に瀕り陸地測量部、道廳等の測量隊に働いたことのある六十に近い老人で、この邊の地理に精しいものであるが、残念なことには彼もその名を知らない山もある。例へば地形圖「札内川上流」を南北に縦斷する主脈には、三角點をもつ峯も三つあるが、山名は一つも誌されてゐない。今度彼に依つて知り得たものは、その中で最も北に位する一九七九・四米といふ三角點のある山一つであつた。それからまた戸蔦別川上流の山々に就いても彼に依つて明かにすることの出来ないものもある。それら無名の山の中には、他の有名の山の如く嘗て古種族に依つて名付けられた名稱をもつてゐるものもあらうし、また最初から全然名前を付け

られなかつたものもあらうと思はれる。それらの山に就いては水本自身も亦彼等の古老について知りたく思ふところであるが、地理に精しく物識れる古老は既に死に絶えて、今は最早知る由もないといふことである。それで主として戸蔦別川上流の山々について、現在の水本の知識と私達の意見を綜合してみると大体次の如くである。先づ前述の地形圖には名のついてゐない一九七九・四米の山は「カムイエクーチカウシヌプリ」といふのださうである。「カムイ」とはアイヌ語で普通「神」の意であるが、この場合は「熊」の意で、「エクーチカ」は「轉ばした」の意「ウシ」は「處」「ヌプリ」は山であるから「熊を轉ばした山」といふ意味である。元來日高山脈は熊の多いところで、前年和辻君らと行つた時には、戸蔦別岳附近で三頭の熊を見たし、一昨年高橋君らが行つた時にはピリカベタンの上の方で一日のうち十回も出合つたさうである。恐らくはその往昔この山の附近で彼ら先住古種族が「熊」を射死したものであらうか。或はこの山の急斜面を手負の熊がころ／＼と轉り落ちたのを面白がつてかく呼んだものであらうか。何れにしてもそれは似つかはしい名前である。それは札内川上流に

聳え立つ顯著な一峯で、戸蔦別岳附近から見ると、南方に當つて實に豪壯な姿をしてゐる。日高山脈の中央に座して高さから言つても大きさから謂つても當然名のあるべき山であるが、昨夏山縣浩君らがやはり水本を連れてその山に登つた時には、彼はその山名を忘れてゐたといふから、恐らくその後於て、彼の舊い記憶を想ひ出したものであらう。とにかく此の立派な山の原名が明かになつたことを、日高山脈とそれに關心をもつ人達の爲に喜ぶ。

次に戸蔦別川上流の山々に就いて、北の方から言つてみると、地形圖「幌尻岳」に戸蔦別岳とあるのは、嘗ても訂正しておいた通り、美生岳の誤である。水本もさう謂つてゐるし、若しまたその源をそこに發する川の名をとつてもつてその山に冠したのであるとすれば、美生川の源に巍然としてそより立つ此の峯をば、當然美生岳と呼ぶべきである。地圖でも明かであるやうに、戸蔦別川の源流を發せしめるところの峯は、幌尻岳への山稜の分岐點をなしてゐる一九六〇米に當つてゐるからである。いつたい此の邊の山の命名の動機には二通りの別があるやうである。一つは、前に書いたカムイエクーチカウシや、幌尻の如く、その山

に就て何か特別の謂れがあるとか又はその山貌などに因んで名付けるもので、他の一つは、既に名をもつ河の源（或は正確に源といふ程の意味ではなく唯漠然とその上流にあるといふ程の意味に於て）にある山といふ意味で、その河の名をもつて直ちに山名とするものである。山がかなり奥深い爲かこの邊には後者の場合と思意される例がかなり多い。この美生岳も、次に書く戸蔦別岳などもその好例である。美生岳は屋根形をして威張つてゐるから直ぐ解る。それからピバは「川貝又は烏貝」、イは「ある所」、ロは語を強める助字ださうで、この川から川貝を産したからかく名付けたのであらう。

戸蔦別岳。前に書いたやうに、戸蔦別川の突當りの一九六〇米の峯を呼ぶ。これも水本に従つたもので、私達もその正當を認めるし、從來もかく呼び來つたものである。この峯は、夏美生岳の方から尾根傳ひに眺めた時は、左程にも思はれなかつたが、冬戸蔦別川上流からするとかなり錐立つて見える。

幌尻岳。(二〇五二・四米) ポロシリは「大なる陸地」の意。日高山脈の最高峯で戸蔦別岳の南方にその名の示す

が如く雄大に聳えてゐる。これなども彼らのもつトボノミイの素朴性をよく表してゐる。地形圖「札内岳」にあるポロシリ岳と區別する爲に日高幌尻と呼んでゐる。

北戸蔦別岳。戸蔦別岳の直ぐ北から西に向つて一八〇七・九米三角點への尾根を派生する無名峯を呼ぶ。この峯の原名は何か、或はもとよりの無名の峯か水本も知らない。僕一個の考では恐らく昔から無名の山であつたと思ふ。といふのは、生來素朴なアイヌ人が、そんなに細々しくいちいちこんな奥の峯に名を付けたであらうとは考へられないからである。しかし戸蔦別川を遡行して行くと、最後の三肢あたりから眞正面に當つて寧ろ戸蔦別岳よりは雄大に見える一峯だから何か名があつた方が便利のやうだ。それで今度新にかく呼ぶことにした。

今度は地形圖「札内岳」に移つて、ポロシリ岳といふのは、前の日高幌尻と區別して俗に十勝ポロシリと呼んでゐる。これは帶廣あたりからも富士型に見える山で、謂つてみれば日高山脈に對する前山といつたかたちである。頂上近く迄樹木があるために、冬はあまり眼を索かない。これから出てゐる戸蔦別川の小支流をオピリヌブといふ。

札内岳。前年水本にきいた時には、札内岳とは何の峯を

いふのか彼は全く知らなかつた。札内川といふのはあるが札内岳といふ名は彼にとつてその時始めてであつたらしいそれで私達は川の名をとつて、地圖の札内岳をピリカベタヌ岳と呼び、又この峯から西走する山稜が主山脈に會するところを、エサオマントツタベツ岳と呼ぶことにした。し

かしその時私達はちよつと耳觸りのいいピリカベタヌといふ澤の名に挿れ過ぎてゐたと思ふ。今度水本に再び質してみたが、やはり彼の答は前同様であつた。けれども若し札内岳といふ名をつけるなら、私達がピリカベタヌ岳と呼んだ山、即ち地形圖の札内岳にすべきであらうといふ彼の意見であつた。私達もそう思ふ。といふのは、事實札内川の源流は此の峯の南面に發してゐるからである。而も既に地形圖にはそう記載されてゐるのであるから、今更改める必要は少しも無い譯である。以後は混雜をさけるため、札内岳といふ名稱のみを用ひ、ピリカベタヌ岳といふ名は除くことにする。但しエサオマントツタベツ岳といふ名はその儘にして置く。エサオマンとは「南向き」といふ意味ださうで、事實エサオマントツタベツ川は眞南に向つてはいつ

てゐる川である。

最後に、ムラウシ岳（一七三一・三米）といふのは、トムラウシ川の上流にあるもの。此の川の名は地圖には記されてゐないが、美生川の支流で、獨立標高三三一米と記入されてゐる所にはいつてゐるものをいふ。美生岳から東に派生された山稜の一小峯である。

戸蔭別川上流の山名は大體以上の如くであるが、これから以後同地方の紀行、山岳誌等を諸兄が書かれる場合にもこれからの山名を用ひていただければ幸である。勿論原名が解ればそれに據るべきであるから、同地方の地名について大方の御高教を切に希望するものである。

(一九二九・一二一〇)

積丹半島の春

山口健兒

積丹シムダニの春は遅い。山旅の用意にその二日ばかりを送つた我々が、遅い積丹の春を聞いたとき或友が「ありやしベリヤの山かい」と問ふたと云ふ積丹岳連峯の雪の衣の厚さをほく笑ますにはゐられなかつた。

来る冬も、来る冬も、雪の難場として排雪車の立往生の噂を聞く銀山のトンネルを覆ふ連層の、群つて高く日本海の怒濤に乗り出してゐる半島がこの積丹半島なのである。

出入多きその海岸線は屏風を曳きめぐらした如く、幕を張り廻らした如く、神斧の巧妙は峭岩を削り、大岩を磨いて、千種萬類の奇岩を羅列して追分の哀調に艫を漕ぐ舟人の眼を樂しませてゐる。

積丹の春は遅いのだ。この半島を支配顔に裾を曳いて安

座する積丹岳は冬の粧ひを拭ひ切らないで、次第に裾の平原を、巒岸曲汀を、緑に、紅に淡染めにしてゆく春の鮮かな影を瞰下しながら、黙然と獨り背後に連る白雪巒々たる山々をたのんで、春に遅れて立つてゐる。

積丹半島の遅い春を目あてに、蘭島、鹽谷の山を越して今年は鯨の不漁に悩む余市の驛に私と梅澤君とが降りたときは、北海道の春に多い大風に、野も山も文字通りの黄塵萬丈で眼も充分に開いては居られない位であつた。名にし負ふ苹果の花も何處へやら、いつも嗅ぐ鯨の臭ひも絶えてしない。余市より積丹半島の端れまでの船のことを苦に病んでゐたが驛に下りるや廻送店の客引が余市第一の船だから、これにのれと二三人切符を賣りにくる。

切符賣りに教へられた通りに市内乗合自動車に乗り、町はづれの船着場へゆく。此處は海上に出た岩により自然に防波堤となり、末廣及甲谷の二廻送店が競争で余市美國間の往復をやつてゐる。

風の強い海上は白い浪頭の崩れを見せて一面に廣々と、けれど春らしい優しみをみせて視野一ぱいに廣がつてゐるやがて待合せた客が撞つて我々は艇に乗つた。北海道の小舟は東北より北ではよく見るが他ではあまり見えない種である。舳の方で四人位が左右に細い櫓を出して丁度ボートの様にして漕ぐのである。

かくて我々は二百噸ばかりの發動機船外濱丸に乗り移り爆音と白い水尾を引いて余市を出帆したのは十時半であつた。風であれば一時間半で美國へ着くと云ふが今日は二時間位かゝるだらうと話してゐた。

余市を出るとこれより先の海岸は皆怖しい絶壁、断崖の連続である。或は大小の奇岩海上に出没し、壁をめぐらした様な岩がその背景をなして海面に覆ひかゝり沖ゆく船を威壓してゐる。シリバ岬、オトドマリ岬、ワツカケ岬、瀧の淵の岬、蛸穴の岬と次々へつづき、船は波を驅つてその

縁をゆくのである。甲板に出て見れば断崖の間の僅かの空地を耕した中に二三の漁家が點在するのが見える。雪に白い山々が見える。かくて船は山中、歌棄、と寄港し、古平港につき十二時半には目的の美國港へついた。

美國の町は思つたよりは大きく丁度徴兵検査の日で賑かな町へ二人の異様な風態がゾムメルスキーをかついで這入つて來たので町の人は不思議さうにジロ／＼見てゐた。

北海道の春はどこでもさうである様に激しい風が町を吹き通してゐるので大低の家は戸を閉してゐた。晝食をとるべくとある食堂に入つて、色々土地の話を聞きながら二時間程もぐすついてゐた。

これよりさきのコースに就ては大體、美國川を朝つて海田牧場に泊めてもらひ、翌朝海田牧場より積丹岳への尾根へとりつくつもりであつたが、丁度來合せた雜貨店の主人の話により急に變更して、余別町へ向ふ街道に出て、途中の中村牧場へ泊めてもらうことにした。その雜貨屋で買物などをして美國を出たのは二時半であつた。

美國より余別に向ふのに新道と舊道とがあり、新道は自動車を通ひ、道も樂であるさうだが、大分迂回しなければ

ならない。我々は舊道をとつて歩き出した。

美國を出て茶津と云ふ所へ出る僅かの所は一つの丘を乗り越さなければならぬ。その丘はそのまゝ海上に突出して黄金岬となり深淵を作つてその前方に寶島を浮べ、その直立した岩と濃紺の海色、漁舟漁家の點綴は繪の様な靜かな美しい景色である。

茶津の人家は相當急な坂道の兩側に並び、半農半漁の生業に樂んで和やかである。

間もなく人家は切れて、急な上り道も一段落をつけてダラ／＼登りに移る所に、火の見梯子が半鐘を下けて立つてゐる。此處から見た黄金岬、寶島の眺めも亦格別なものである。これより少し進むと目指す積丹岳が長い裾を曳き、雪を美しく身に粉飾して現れてくる。寫眞さへ一度も見なかつたこの山がかくも美しいとは思ひつかなかつた。唯あまりかけ隔れてゐるために存在をさへ忘れられてゐたのを惜しまざるを得なかつた。

積丹岳を左に見て道はやがてダラ／＼の下りとなり落葉松の林に入つて視界は全く狭められるが、春の息吹きは落葉松に淡緑の端麗なる若芽の萌しを促して、快い五月の世

界を現し、其處彼處には間斷なき藪鶯の朗らかな囀りを響かせてゐる。森林の美は秋は雜木林に、春は落葉松の林にあると私は思つてゐる。

白河牧場を過ぎて道は立派な新道と合する。ここらあたりも快い落葉松の林である。鶯は實に賑かに歌つてゐる。唯何をする事なしに卅分程、煙草をのんだり寢そべつてしまひ、又歩き出したときは四時も過ぎてゐた。

團子茶屋もすぐ通り越してしまひ、歩き難い作りたての丸石のゴロ／＼した道を、再び左に積丹岳の秀姿を見てゆくうち、間もなく小樽茶屋もすぐ中村牧場についた。

この牧場は傍ら水田の經營までやり中々大きい。主人は中村剛雄と云ふ四十年配の人で、快く我々を泊めてくれた。ついたのは四時半も過ぎてゐた。閑にまかせて庭を見物にゆけば中央に池をはさんで、中島には風雅な橋をかけ、亭、木石の趣きは主人の風流さをしのばしむるものがあつた。水田には立派な揚水機まであつた。

そのうちに風呂にと案内されたが、鯉を煮る大釜の五右衛門式のものなのでタヂ／＼として遂に遠慮してしまつた。

明くれば五月十八日の朝、風は相當にあるが美しい晴天である。積丹岳は大きく浮き出てゐる。中村氏の好意に感謝しつゝ七時八分に出發した。

暫くは昨日の道を戻つて七時十五分小樽茶屋をすぎ、同三十分に積丹川に架したる橋に出た。その側より本道に隔れて笹原の緩斜地を小徑を傳ひながら、落葉松の林の中へ這入つてゆく。その林を出ると稍廣い小徑に合し、ダラダラと登つてゆく。放牧した二三頭の馬が無心に笹の葉を嚙んでゐたり、馬に乗つた牧夫が悠々と朝まだきの原を歩いてゐた。路は急になつて臺地になつた上へ出ると、再びゆるい道が積丹岳よりの尾根へ向つてついでゐる。笹のない草地で、エンゴサク、スマシレの類が道を織つてゐる。

それをすぎると廣い所に出て徑が多く岐れて見分け難いが、左へ左へとゆくうちに、ネマガリダケの叢生の中に入り水溜りの多い道を上つてゆく。

今までは雪に白い積丹岳の頂上を望み見ながらであつたが、そのうちに白樺の林に入り、視界は全くなく、丈を覆ふ笹の中をゆくのである。このあたりは竹の子（ネマガリダケの若い芽）の名産地であるために中途まで徑があるの

だと云ふ話である。

徑に雪が時々横はつてゐるが、それも次第に多くなる頃に徑が見わけ難くなり、十時四十分には全く道がなくなつてしまつた。

暫くは雪の上を歩いたり、笹の中を漕ぎまわつたが、十一時頃に遂にゴムメルスキーを履いた。

それからは岳樺の林の中の雪を傳つて、積丹岳の北側を登つてゆく。朝のうちは晴れてゐるがこのあたりに來るとドンヨリと曇つて十一時半頃から廿分程、軽い雪が降つて來たりした。

次第に上るにつれ傾斜が急になり、スキーの横滑りが目について來たので十二時半にはスキーを脱いでしまつた。

一時には積丹岳のすぐ東方の瘤にとりつき、そこで晝食をとつた。此處から見た積丹岳は、頂上附近がわづかに偃松で百米も下ると恐しい笹藪になつて見える。北側を見てゐるので雪は可成り多り。

クランボンで一氣に頂上まで登りつめ、一時五十五分に頂上についた。

頂上には雪がなく、わづかに土が出て平地になり、櫓は

倒れてゐるが三等三角石標が頭を出してゐる。

頂上より南方美國川上流はかなりの雪であるが、西方はネマガリダケの藪で密に覆はれてゐる。積丹岳の尾根は遙かに下つて、立派な姿を持った余別岳（二二九七・八米）に下るとき、その尾根はガラ／＼と下つて南方のボンネアンチシ山（一一四三米）に連り、美國川の谷へ下つてゐる。

今年例年に比べて半分も雪が少いと云つてゐるが、相當の雪量は山々を美しく見せてゐた。併し雪のはけた所は怖しい笹藪を青々と風になびかせてゐる。

登つて來た尾根を見返せば、いつもながら随分歩いて來たと思はせる雪の上の白樺の疎林と、その先の青々と草原の様に見える笹原が擴がつてゐる。

海岸は絶壁をなしてゐるために、汀線は見えぬが土地が急に切れて海と續き、五月の晴れた紺青の海は、白沫を嚙んでゐるのが見える。積丹半島の沖をめぐる汽船の通るのが見える。

遙かの笹原の中に今朝出た中村牧場の水田が陽に光つて硝子板を置いた様に瞳孔に入つてくる。

遠くを眺めれば霽に霞んで暑寒別岳連峯の白銀の威容が

天を壓して連つてゐる。

東の方は余市の市街が遙かに、その先には余市岳から南方マツカリヌブリへの連岳が重なり合つて、大きな眺望を展開させてゐる。

積丹岳の頂上は偃松、笹及び雪から隔離された稍凹んだ平地を持ち、ために風さへ除けて快い場所である。そこで暫くは四方の大觀と登頂の愉悅に浸つて、晴れた蒼穹の下に寢をべつて時のうつろのを忘れてゐた。

二時四十五分にやうやく頂上を出發した。美國川側は急に切立つてゐるので、西方へ雪を傳つて下り余別岳の方へ向つて歩き出したが、こゝより前方は笹の密生にて、加ふるに岳樺の偃つたのが混じり、その歩き難さは思ひの外であつた。少し歩いてゐると見當所か、どちらへ向いて歩いたらよいか皆目わからないのは閉口した。

仕方なしに他のコースで余別岳へ向ふべく又後戻りして頂上下の雪の上へ出た。そこで色々相談した結果、この先泊れそうな所もないから、頂上へ天幕を張つてしまへと云ふことになり、再びノコ／＼頂上へ戻つてしまつた。

頂上着は三時四十分、早速前に寢をべつた平地の石など

を投げ出して天幕を張り薪を集めて落つき出してしまった

その夜は暗れて星が耀いてゐるが、寒さは中々であつた

明くれば五月十九日の朝、輝しい太陽が我々を迎へてくれるだらうと思ひの外、寒さが激しくよく寝つかれも出来なかつたが、明るくなつたので天幕から顔を出せば、昨夜中に雪が降つて天幕の外に投げ出しておいたものは何も見えず、天幕の傍の偃松は雪に覆はれてうなだれてゐる。

雪は二寸位も積つてゐるのだ。驚くと同時に我々の元氣は少からず減じてしまつた。どうしたものかと二人で話したがさつぱり煮え切らない。ボンネアンチシ位までゆくつもりだつたが、こんな雪が降る様子や寒さの用意も別にして來なかつたのだから、この先が思ひやられるなんて弱音まで出てくる。歸つてしまふか、歸らうと云ふことになり又袋の中にもぐり込んでしまつた。

扱てもぐり込んで何しろ寒さが寒さなのでまた匍ひ出してしまひ火でも焚く事にしやうと起き出してしまつた。

そして雪の下の薪を集め出し、雪をどけて火を焚き出したが潤つてゐるので中々火がつかない。あきらめて又天幕に

は入り袋へもぐつてしまつた。

そのうちに薄陽がさして來たので、又起き出して火を焚き始め、愈くにして火を熾し雪をとかし出した。天氣は一面の雪で余別岳の頂上も見えないで裾だけが大きく見える時々雲間から僅かの陽が漏れるが、天候はどうも怪しく風は相當に強く吹きつけてくる。愈々余別岳の方へ行くのを断念してしまひ、飯を炊き出した。

朝飯を終つた頃、少し雲が高くなり出したので、身輕で余別岳の往復をやらうと云ふことになり、天幕などを置いた儘晝食を持つて八時五十分積丹岳頂上を出た。

今日は昨日とは反對に少し苦しいが尾根を真直ぐに歩いてしまへと偃松の中を渡つて行つた。

二百米もゆくと急に下り偃松の密生で動きがとれなくなり西側をへつるべく西側へ下りへつり出した。此處は偃松と笹の混生で急な壁の様になり、加ふるに露岩多く並大低の苦勞ではない。降りたての雪は滑りやすく、頭から足の先まで雪にまみれて眞白になり中々の骨折りである。かくて再び尾根に出てホツとしたが、余別岳との最低部まで出るには、見れば中々の苦勞じやない。梅澤君はどうも身体

のコンデションが變だと云ひ出すし、この苦しみを歸りに又登りでも一度やると思ふとウンザリしてしまひ、じや此處で景色を見て歸らうと云ふことになつてしまつた。

時間にして約五十分程歩いたが距離は幾らも來ては居なかつた。白樺の木に登つて思ふ存分四方を眺めまわして遂に引かへしてしまつた。天氣は相變らずよくなりさうにもない。

歸路は南側へ出て偃松を漕いだり、笹に釣り下つたり、所まだらの雪を傳つて三度目の積丹岳頂上を踏んだのは十時半頃であつた。

それから天幕を疊み、荷作りをして十一時卅分遂に積丹岳頂上につきぬ別れをつけ、ゾムメルスキーで一氣に滑り下りて行つた。

登りの通り下つたのである。この方面は尾根筋は眞黒に偃松が首を出してゐるが北西側は一面の雪で右山の斜滑降でドン／＼と飛ばして行くことが出來た。

そして昨日スキーをつけた所、即ち積丹岳より東方に走る尾根が北折してダラ／＼と下り、等高線記號の七四〇米あたりへ、午後〇時十五分についた。そのまゝ休まずに、

次第に斑らになる雪を傳つて下り同〇時卅分にスキーを脱ぎ、軽く晝食を攝つた。

これより先は何とかして路を見つけなければ物干竿になりさうな太いネマガリダケの籐をどうすることも出來ない木に登つたり、あたりをガサ／＼やつてゐるうちに見覺えのある所へ出ることが出來、間もなく道も見つけた。

それからは道を傳つて一氣に駆け下りてゆく。實際このあたりのネマガリダケの太さには吃驚する。それが密叢をなしてゐるのだからとび込んだら並大低の苦勞じや手に負えない。従つてこの筈なら名産にな十分なる價值があるわけだ。里人は下から順に雪の消えた所を上、笹取りに出かけるのださうである。

午後二時七分には美國より余別へ通ずる街道の、積丹川に架した橋へ出ることが出來た。

そこから間もなく團子茶屋もすぎ、再び美しい落葉松の林の中の新舊兩道岐れ路に二時廿分についた。

美國の町へは三時廿分についたが、余市へ通ふ汽船は既に出帆してしまつた後である。どうしたものかと考へてゐたら余市まで乗合自動車が出ると云ふので早速それに乗る

ことにした。

自動車が美國を出たのは三時廿分であつた。途中古平で他の自動車に乗換え、奇岩峭立の海邊を、或は漁家の間を走りぬけてゆくうち山の中に入り急な登りを上つてゆく。

片方に深い谷を臨んだ曲折した羊腸たる道を、或は登り或は下つてゆくのである。多少箱庭的であるが美しい景色の中を貫いて、新緑の快い香りがたまらなく氣持よい。

この自動車が又呑氣なもので、エンヂンが赤く灼けてしまひ、途中の小川の水を運轉手が帽子で汲んで冷したり、村の子供が三人位後部の豫備タイヤに乗つて家に歸つたりして午後六時十五分に無事に再び余市に着いた。

私等はこの山登りを、思ひ通りに終ることは出来なかつたが、北國の春の輝しい律動の中を自由に呼吸出來た旅であつたことを愉快に思ひ、少しも心残りはなかつた。

いつかのとき、或は永久にないかも知れないが、再びこの積丹半島の春を訪れて、この旅で味つた快い氣分を心ゆくまで吸つてみたいと思つてゐる。

附記 この旅行は昭和三年の五月である



春の唐松岳

小池文雄

此の行は最初唐松頂上小屋を根據地にして、五龍岳を試みる心算で計畫したのだが、其の間際になつて、友の一人が風邪で不参加になつたので日程行程共に縮少した唐松岳を中心に不歸谷、大黒邊を徘徊した小さなツアーとなつてしまつた。三月卅一日四谷着、四月一日荷物の半分を途中八方中繼の小屋附近まで揚げる心算で午前九時十五分四谷發、最初今日は朝の中小雨だつたのでどうせ行かれなと思つて朝寢をしてしまつた。今日は比城村の村會議員選舉で案内人夫が出ぬので、明日一氣に唐松小屋まで行く豫定で、又明日の朝までは、東京から山中君が来る筈なので其れを心待ちにして、單獨にてアルコール、罐詰類、ピッケル、カンヂキ、コツヘル其他の金屬食器や、雪中に置

いても苦にならぬものをリックに入れて出る。十時細野の尾根にかゝる。朝の小雨は晴れて天氣は好調に向ふらしいが、千二三百米邊から上は濃密な霧らしい。約二十日許り登行をしなかつたので身体が馴化して居ないため、普通スキーでは一時間三百米近く登れるのが、二百米位だ。雪はべとべとに腐つてゐて氣持悪い。でも廣尾根なので雪崩の心配は全々無い。千三百米邊の樹林中で晝飯をやる。十二時半出發、一時半頃千六百八十米邊の黒檜の頭に出た頃より霧の上層に陽の光を見、千七百米のダツクリまで登つたら全く霧の上部に出てしまつた。小蓮華の南面の絶壁、白馬のえぐられた岩膚、杓子、槍皆夫々昨夜の雪に岩膚を飾つてゐる。遠くは妙高、火打、燒の山山の頂部のみが雲の

上から此方に對應してゐる。槍、仙人の尾根では晴風に雪が亂舞してゐる。コバルトの空と、尖峰とをかすめて時々陽に映ゆる白雲が飛ぶ。一九七四米の三角點の尾根の突端に出た。南股入の谷底までグット落ちてゐて氣持よいとも物凄いと。尾根の南側をへつゝて、二〇〇五米の圏の西方の鞍部に二時十五分着。單獨行で始めての山道なので、地圖を見乍ら行くので手間取る。未だ小屋は何處にあるのかわからぬ。時間も遅いので目標の岩の蔭にピッケル、カシヂキ、飯盒、コツヘル、砂糖、罐詰類、アルコールを置いて、海豹皮を外づして二時三十分滑降し初める。一七〇〇米邊まではブリーカブルクラストであつたが、其れ以下は適宜に融けたベトベトのザラメ雪なので、可成の急傾斜の所でもステムボーゲンに丁度よい。約五十分にして細野部落に着。一氣に千二三百米下りるのでからスキーのはづむ事、氣持のよい事おびたゞしい。四時半四谷白馬館着。

未だ山中君は到着せぬ、晩になつても。來ぬ愈々明日は人夫と二人きりで行く事に決める。四月二日小池文雄、案内横川庄次郎、案内はスキーは充分履く。唯五龍へは行つた事が無いと云ふので何だか氣掛りだ。米六升五合、丸乾

し、干瓢、味淋乾し、福神漬、バイナップル罐、寢具として毛布三枚、シラフザツク、天幕(布のみ)横川は約五貫匁負ふ。今日は朝雨戸を振ふ風の音が、かたかたとかすかに聞え、夜明けに小雨が舞つた。空はどんよりしてゐるが雲脚が段々上つて行くのと氣温が比較的下がつてゐるので駄目なら途中から引き返す心算で出發は六時半。新聞の天氣豫報欄、氣壓圖を見様と思つても四谷では一日遅れて來るので何の役にも立たぬ。昨日より荷は重いが身体が幾分馴れて居るので行程は捗る。朝早いのでカチカチだ。

昨日のシュプールの通りに登る、カンテの勞だけ省ける一二〇〇米邊より濃霧の層に入る。昨日よりもひどい。一七〇〇米の黒檜の上まで來たら新しい金カンヂキの跡があつたので大聲で叫んだら、つひ下で應答する。霧の中で行きすぎたのだ。聲のする方へ降りて行く。神戸高商の二人の者だ三月廿九日に登つて今其の下山の途なのだ。頂上の様子を聞く。八方中繼の小屋は全々使用出來ぬとの事。今朝劍が眞黒に曇つたとの事。兎に角又登る。十二時頃前日の荷を置いた岩蔭に着く。

朝から頑張つて餘程腹か空つたので晝飯やり、バイナップル

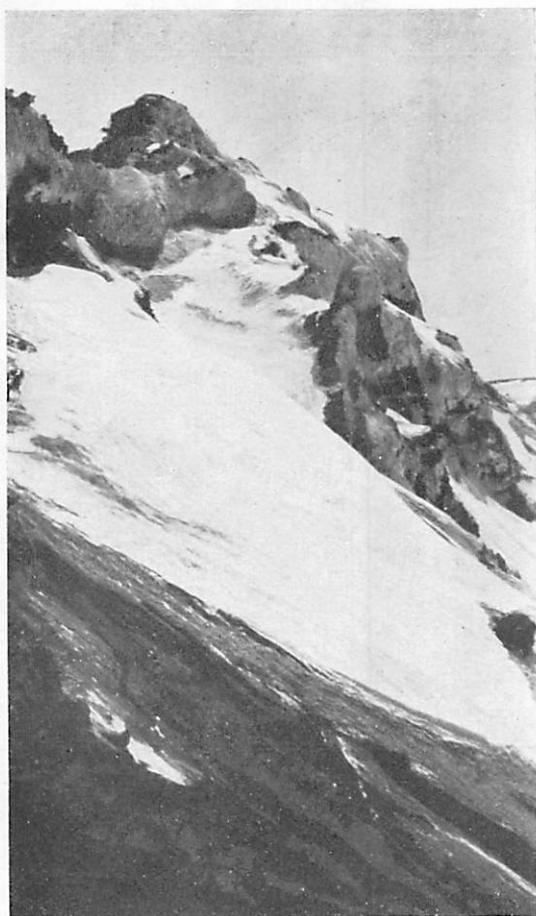
ブルの罐を惜しいか一つあけた。

それで漸く元氣が付く。併し荷物は倍になつた。肩に堪える。暫くして八方の小屋に着、聞いた通り雪が一杯詰つて使用出来ぬ。此の邊少しスキーを脱ぐ。二二〇〇米―二五〇〇米までの間は雪か深かつたので又スキーを着ける。

二四五〇米の小峰で小憩、又バイナツブルを開ける。疲勞した時は流動物に限る。今日はよくよくへたばつた。二時行動開始。此の邊で寫眞二三枚撮る。白馬、杓子、槍は銀鍍金の様に雪と岩とが陽に映えて居る。がそろそろ天氣が悪くなつて來た。唐松の峰を早ヤ夕陽を受けた桃色の雲が包んでしまつた。氣はせく、身体は動かぬ。そうなるとしほ不安の念が高まる。荷は益々肩に重い。しまひには二五〇〇米邊でスキーを脱いでカンデキに代へたが、スキーを擔ぐのさへ臆苦になつて捨て、行き度くなつた。

二六七〇米の峯の東側の雪屁下を横に慎重にステツプを切つたのを最後として漸く主脈の尾根に出た。日本電力の送電線の試験材料が其の儘になつてゐる。早や小屋も近いと知る。漸く安心。今朝降つた連中の足跡をたよりに雪の中に小屋を見付ける。午後三時十五分。此の時許りは眞當

に助つた様な氣分になる。既に午後遅いので四邊は一面の濃霧で何も見えぬ。入口の菰をまくり中に飛び込む。實に完全な小屋だ雪は少しも入つてない。二重張りの牢固としたものだ。暫くの間は眼が馴れないので眞暗だ。今朝出發した連中が火を消して行つたので、爐が濕つてゐる。仲々火が燃えぬ。亞鉛板の上で焚いたら直ぐついた。中は室の北側に更に岩倉があり、南には空室が二つあつて、其の一つは雪が半分詰つてゐる。便所も中に付いて居て實に氣持が善い。夕餉の支度が出来る。雪の水で飯を焚き、干瓢の味噌汁、丸乾し、味淋乾し、等々極めて野暮な食品に舌鼓を打つ。外は絶えず飄々の風の音。午後六時頃外に出て黄昏の山を眺むる。最前迄の霧は晴れて眞ぐ前には唐松が大きな脊を南に向けて北に對つてうづ伏せになつてゐる。雪が青い迄に光つてゐる。劔がとぎ澄ました様に寒空につゝ立つてゐる。大窓のキレットから、猫又、毛勝に到るスカイライン、別山のうねり、雄山の峯頭の東面の數個のカールが掃いた様に光つてゐる。黒岳―藥師―鷲羽邊りまで遙か南の山々が五龍の西の尾根からのぞいてゐる。寒くてたまらぬのですぐ小屋にもぐり込む。夜はココアと、白魚を湯に



□ 十 勝 □

といて飲んで腹をがぶがぶにした。顔がびりびりして其の上爐の火がかんかん起つてゐるので、熱いやら眼が痛いやら、さうかと云つて寒いから火にあたらぬわけにもゆかぬ仕方なしに手拭で頬かむりをして、涙をほろほろ流して火に當つてゐる。昨日迄の人の世の中の歩みがまるで夢の様な気がしてならぬ。僅か數里の面かも垂直三千米足らずの此の場所が斯くも浮世離れがしてゐる事が不思議でならぬ自分の山歩きの經驗が浅い爲めか、又は山に對する思考が幼稚な故爲か、よく登山家の名文に見る様な哲學的思索や何かと湧かぬ。寧ろ無理にさうした念慮を追はうと努めないのが其の様な者に取つて自然であるかも知れない。九時ランプを消して、ありたけのシャツ、ズボン下をはいて、シラフザツクの中にもぐり、更に天幕にくるまつて寢る十二時頃寒くて眼を醒ます。天幕を天井に吊り、四隅を部屋の端の釘に結び付けて、其の中には入て寢たら前よりは少しは睡れた。朝迄二度眼を醒まし、其の度に炭を爐に押しあけてどんだん火を起すのだがまだ寒い。朝五時半外に出て見る。拭はれた様な快晴、其の中に劍の中腹以上が陽に映えて桃色に染められた。五龍も横日を受けて肩を

怒らしてゐる。今日は快晴に恵まれそうだ。併し風は強い横川は氣が進まぬらしく朝飯の支度が捗々しくない。兎も角五龍をやる心算で七時半必要な食料と防寒具の外成る可く荷を節約して身ごしらへも甲斐々々しく出發す。

劍、立山、遠く白山、近く唐松不歸に到るグラートが日を浴びてエナメルのように光つてゐる。小屋のすぐ南のピークに昇り尾根傳ひに南に行く途中で引き返したと云ふ昨日の連中の足跡がある。道は殆んど無い。大黒に向つて半分も下りかけた頃一寸したギヤツプにぶつかつたが、繩を持つてゐなかつたので何となく不安であり横川も五龍へは未踏なので彼もしきりに歸還を説くので残念ながら斷念した自分としても昨日の大登高で疲労が充分癒えぬので恐らく無理に行くとしても時間は豫想外にかゝつたかも知れぬ。それに時間はあまり早くないし今日は一日附近の山を歩いて日をつぶす事にして引き返す。冬の五龍をやるには寧ろザイルテクニクと、アイステクニクに長じた熟練せる三四名のパーティーを要する。現時の山案内の欠點は岩と氷によき者はスキーが下手で行動が不便だし、スキーを可成やる者は氷と岩の技術に信頼を置けぬので何となく不安の

念に驅られ、氣乗りがしなかつたので止す。今日は一日中附近の山歩きに費す心算で足のテンボもゆるめ尾根の突角で、雲海の彼方に浮く富士、八ヶ岳、更に遠くは赤石の山波に見惚れる。出るか出ぬかわからなかつたが物は試しにカメラに納める。後に家へ歸つて現象して見たら、五十里彼方の山波雲海まで撮れたのは少なからず喜んだ。八時四十分小屋に引き歸し、安易な氣持になつて唐松に遊ぶうと出掛ける。雷鳥のあどけない眼に出遭ふ。唐松から北に續くギツフェルが濃い岩の色と輝く氷稜との交錯に由て、力強い強を眼底に與へる。九時半唐松頂上着。此所は二等三角點の筈、槽の中央の雪を掘つたら果たして三角標が出て来た。日は高くなつて雪は目眩しい許りに眼を射る。暫くして不歸谷の方へ降り始むる。春の強い日ざしの下に、全々吹雪や雪崩に解放されて、何處迄行かねばならぬと云ふ迫られる感にも襲はれずに雪の山稜のワンデルングこんな極樂が又と此の世にあらうかとさへ疑はれる。眼の下の谷は眞黒の岩と、深いルンゼとの錯綜、北を見やれば遙か妙高、火打、燒の力強い岩多き峯頭。更に戸隠、飯綱……岩質……横手、四阿、淺間にまで。名も得知らぬ奥日光よ

り岩代、越後の山々まで白銀に輝いてゐる。反射光線は鋭く眼を射て、黄色眼鏡を掛けてゐてさへも之等の景色を物の一分と熟視する事が出来ぬのが恨めしい。白馬への尾根は大きく蟠居してゐる。唐松より第三のピークまで來たら勿論散策氣分で來たのだが十時近くなつた。でも北面は青氷の所が多くビツケルの有難さを感じた箇所も多かつた。此所の三番目の峯頭でココアを沸かし僅かの晝飯をやり、黒部の谷、猫又、毛勝の山々、劔、立山は元より遠く南、槍穂高までも飽かぬ眺めを眺めて、十一時頃元來し道を引き歸す。祖母谷に落ちて居る掃いた様な眞白い尾根の其處此處に、かもしか、熊等とおほしき足跡の點々と續くを見る今朝五龍を斷念した故爲か氣抜けした様なスランプの状態になつて午後一時半頃小屋の暗がりにもぐり込む。充たされざる悲哀而かも數ヶ月の心構へせし事の挫かれたる何となき寂しさと何かの終りを感じしめられる。爐の火を黙して見つむ。計畫した事柄を捨てたとすると、扱只無性に待たれるものはあの廣大な八方尾根の滑降と、不自由なき里の暖き睡り、其等が幻想の驅り手となつて現れて來る。明日と又其の次の日を待つても此の二人では五龍へは行けさ

うにも無い。氣分の……闘志の燃え立たぬ事が二人の行動意志に差異を生ぜしめるに到つたが、山を眞面目に考へれば考へる程、僅かの氣分の障礙が救ふ不可ざる傾挫を招く原因となるらしい。山を想ふ熱意夫れは以前も今も變らぬと思つてゐるが、最近は慎重になつたのかそれとも臆病になつたのか、第一義的の山が、わかり切つた危険を犯す勇に欠けたものに變りつゝあり、而かも結極登高の意識を持つた人生を裏付け (retine) レハインするものでは無いかと云ふ様な眞の登山家から見れば實に墮落し切つた實利的な考へが浮ぶ様になつて來た。併しこれでも山には入る時許りは何も忘れて無我的に飛び込んで來れるのがせめてもの慰めだ。山での生、山での死、さうした我々の生活の終止を山で行ひ得るならば之れに越した悦樂は又とあるまいと今は感じ、思つてゐても、愈々死魔の招きに誘はれた時は別な氣持で生への愛着のために最後の一步みまで死と奮闘する事であらうと思ふ。五龍へも行かぬとなると小屋の附近にはスキーをする所は無し、銅山跡へ遊びに行くもこんな急谷を又汗水垂らして登つても仕方ない様な氣がして明日急に歸る事に相談する。九千尺の山嶺の夜は飄々の風の

音と赤き夕焼けに暮れて、小屋の中では赤き火がバケツの水を水にし湯にし、沸々とたぎらしてゐる。此所に泊るも此夜限りと思へば僅かの結びし二夜の夢が早や旬日を経た様な長い過古の歴史を持つた如くに考へられる。今夜はあり丈の御馳走して、蠟燭も明々と付けてお互の胸をも打ち明けて十年の己知になつた様な氣がする。午後九時就寝
四月四日。支度は前夜にして置いたので、朝食食つて午前五時四十分頂上小屋を出づ。食料だけ減つたので大分荷が軽くなつた。往路の雪壁のトラバースは相變らず氣持がよくなかつた距離は短いがアンザイレンするが、本當だらうと思ふ。八方への支尾根に下り立つてホツと一安心する今朝歩いた許りの大きな熊か何かの跡が見えた。往きにスキーを履いた個所は大抵スキーを使ふ。二五〇〇—二二〇〇米間。八方小屋の前後は少し脱ぐ。二〇〇五米の圏の邊りより滑降に入る。始め少しはクラストで所々に餅の様な吹溜りがあつて氣持悪かつたが、やがて一八〇〇米邊からはハードスノウとなり、クエルファールンと、ステムボーゲンとでぐんぐん降りて行く。絶えずステムして居るので股が痛くなる。やがて黒檜の上に出、更にどんぐりサイド

スリッピングで降りて行つた。一三〇〇米邊からは少しは雪の表面も融解し、高度が低いので朝ではあるが日のため薄層ながらザラメとなり滑降に好適となつた。午前七時十分細野着。雪解けの土のむく／＼軟い道を、一四谷、八時白馬館着。田圃の畔で横川の紀念の撮影やる。九時十分宿の者と別れて横川に荷を負つて貰つて梁場まで歩く事にして出掛ける。もう雪も切れて橋も通はぬ。飯森の北で五龍と唐松に惜しい別れをする。凝視してやりたい其のグラトなのだが、何せ天氣がよく目が眩しく痛くて双眼鏡でやつと見入る。二三枚撮る。

佐野坂は未だ雪が一杯だ。一時梁場着、青木湖の鮎で晝飯をやる。二時こんな山里に近代文明の尖端たる自動車が警笛勇ましくやつて来て、此所寒村の驛遞に待ち合はせた數人の旅人を見せて遙かに明るき南の安星野さして走り去つて行つた……………二時五十分大町。

さらば山よ、爺の種播きが車窓から見える。遠くなる紫の山よさらば。



草 蓆 の 葉

山 口 生

北海道の夏の登山は殆んど長い澤歩きである。併し此等山奥の深い澤の終日は中々の苦しみであるが、一日一日と目指す山に近づく喜びは忘れ難いものである。重いルックザックと、多いブヨ・ヌカガに苦しめられてはゐるが、遠い昔の姿のまゝでこの身を受け入れてくれるなつかしさは、人の世にひねくれた心も消え、唯山に寝て山を見る幸に自分の存在を見出すのみである。

森の奥よりの誘ひに、前をさえぎる瀑布も、淵も、数多い倒木も、来てよかつたと思ふ感じより以外我々に何も與へて呉れない。山奥の澤歩きは神秘なものである。

我々はこの澤歩きの夕暮に大きな焚火をたいて、靜かな夜を迎へる前に、いつでも何等の技巧なしに多くの鮎、鮠を釣り上げて貧しい晚餐を賑はすのであるが、それと共に

大きな草蓆の葉を忘れることは出来ない。或は皿となり、茶碗となり、鍋の蓋ともなり、又は一夜の夢を守る寢具とも、雨降れば笠となり蓑となる草蓆の葉。その小さいもの莖は又唯一の野菜となつて味覺を喜ばし、その枯葉は時として煙草の代用となつて煙管の雁首の中に姿を現すのである。私は草蓆の葉を見るときいつもアイヌの傳説に出てくるクロボツグルの話を出す。我々は原始人の話を聞くと穴居生活をしてゐた人々をすぐ考へる。併し穴居生活と云へば洞穴式住居を考へるが、北海道の所々方々には豎穴式住居の遺跡が多い。然らばこの豎穴住居に生活せる原始人は如何なる種族であつたらうか。まづ第一に擧げられるものはアイヌの創成記に於いて住んで居たと云ふクロボツグル種族であると云はれてゐる。クロボツグルとはアイヌ語

のコロニ・ボク・ウン・グルの略でコロニは草蔭の義、ボク・ウンは下にある、グルは人の意で草蔭の下にゐる人、即ち小さい人の義であるといはれてゐる。

コロボツグルにはアイヌの説話に色々あるが、その小人ぶりを象したのを見ると、「昔、昔、アイヌの間にまじつて堅穴に住んで居た種族があつた。彼等は一枚の草蔭の葉の下に十人あまりも隠れることの出来る程身体が小さかつた。鯨漁に行くとき、彼等は木の葉や、笹の葉を縫ふて小舟を作り、一本の釣針を携へてそれに乗り、一尾の鯨がとれると、五艘、時としては十艘もの舟の人々が集つて來て力を合せ、一生懸命でそれを海岸に引上げ、海岸に立つてゐる無数の人々は木または槍で、その鯨をつき殺した。」とある。こんな話はコロボツグルが小人であつたと云ふ話から後世の人が大袈裟に言傳へたものであらうが、その小人たりしことは明白である。この話に依るとコロボツグルはどうしても二三寸位の小人としか思へない。

これは少し荒唐無稽に感じられるが、大体に於て前記北海道の所々に見る堅穴に、草蔭の葉で葺いた屋根を仕掛けて住んでゐた種族であらうと云はれてゐる。

草蔭と云つても東北・北海道地方に見られるものは高さも四五尺に達し、その葉の直径も三尺を越すものは珍しくない。北海道の深山の奥深く鱒を釣りにゆく釣師は三枚の草蔭の葉をかけて寝ると云ふ話も聞いているし、山奥の澤にある彼等の釣小屋も大半は草蔭の葉で葺いた木の枝の小屋である。彼等は數日にして二千尾からを釣り上げ、焼いて乾したのを箱に入れて背負ひ、暑い陽を草蔭の葉で除けたり、群るブヨや、ヌカガを草蔭の葉で拂ひながら里へ賣りにゆくののである、そしてそれが十尾一連二三十錢に賣れると云ふ。

彼等はこれと思ふ山奥にまで入つてゐるには驚嘆の外はない。一昨年北見の無加川上流で出遭つた釣師は、北見三國山と武華岳の最低鞍部を越してユニ石狩川から遙か石狩本流の上流まで釣に行くと言つてゐた。

現今北海道の地名は殆んど全部がアイヌ語と云つてもよいが、そのうちに蔭に關した地名、川名も多い。次に目についたのを列記して見やう。

コロウシ(蔭アル所)、コロフル(蔭丘、春日土を掘る五分許にして蔭臺をとりうべし故にこの名あり)、コロコニ

ウシ(蔭多キ所)、コロコニウシユピラ(蔭多キ崖)、オコロ
マブ(蔭多キ川尻)、エブイ(蔭臺。エブイは元來雷の義な
れども蔭臺にも用ふ、この地蔭多し)、エブイ川(蔭臺多
川)、ボンエブイ(蔭臺ある小川)、マカヨ(蔭臺)、マカヨ
ウンナイ(蔭臺ある澤)、マカヨウシ(蔭臺ある所)、マカヨ
ウシユピラ(蔭臺の崖、この所上下蔭臺ならざるはなし)、
コルシユナイ(蔭の澤)、コレバウシユナイ(蔭頭の澤)。

以上の様に蔭に關する地名も相當ある。此等の名は日高
十勝・釧路・根室に多く他の地方に殆んどないのは、これ
らの地方は草蔭の産多きためであらう。植物地理學的にこ
の分布は面白いものと思はれる。

以上は北海道蝦夷語地名解に據つたのであるが、尙同書
に草蔭に關して面白き名に、根室國標津郡標津川筋にケネ

ウオイカベツと云ふ川がある。

「ケネウは鱒の一種にして大きく、この魚は陸に上つて能
く走り、好んで蔭を食す。故に和人呼んで蔭鱒と云ふ。

この魚は標津川より陸を越えて此川に入るを以て、ケネ
ウオイカベツ(蔭鱒の越す川)と云ふと記載してある。

この魚を見たこともないが、肺魚類でもあるのか珍し
い魚である。昔のアイヌ人の見聞違ひかとも思ふが、根室
國標津郡、釧路國川上郡を流れるケネカ川も、正しく云へ
ばケネウオイカベツであれば正しく同一名である。

又、十勝國中川郡には「ケネウワタラ」なる地名がある。
これは蔭鱒岩の義で、この岩の下に蔭鱒多く居るを以てこ
の名ありと書いてあるから、一概に笑抹し去ることも出来
ないと思ふ。(云元)

北海道の春

伊藤秀五郎

春を、移りゆく春を、光ある季節の風に明るむ春を知るためには、雪に埋れた冬を識らなければならぬであらう。動的な自然の韻律の實相を、春といふ季節の一點にた

つて捉へようとするならば、已に春を豫兆する冬を透して、自然と共に春への歩行を進めなければならぬであらう。冬から春への季節的な微妙な推移を體驗して、摩めて春の全き姿相は理解されるであらう。雪に埋れた北海道の冬は永く、地上の生物は飽くまで休眠的である。しかし假借なき風雪の暴威は、恰も冷嚴な自然の命令を奉ずる如く、ありとある地上のものを襲ふのである。その絶大な威力の前には何ものと雖も抗する力をもたないのである。而もその嚴しい冬の自然の中に、既に暖き春の萌芽が隠秘されてゐるのである。そしてその明るき春への豫想の中に、愉し

き春への希望の中に、人も動物も植物も、靜かに生きてゐるのである。

×

十月の終り近く、北海道の脊梁をなしてゐる中央高地の山々に最初に訪れてくる雪は、漸くその地肌との境界線を平地にまで展べ來つて、臘月も暮れ迫る頃にはすべての地上を一枚の白布で覆ひ被せて仕舞ふのである。降る雪は解けることなく、根雪は二月の終りまで降り積るのである。そしてその期間中吹雪の猛威はしばしばあらゆる交通をさへ絶えさせて仕舞ふのである。眞冬となれば總てのものが凍てついて了ふのである。空までが凍つてゐるのである。私は嘗て、凍つた二月の空をかう歌つた。

二月凍る

空が氷る

空にささつた木立の影が震へてゐる

痛い景色だ

凍つた空は。

しかしながら、二月も終りに近づけば、季節の風に北海の彼方遙かに運れたものか、いつしか吹雪も威力を弱め、碧く澄んだ明るい空の日が多くなつてくる。その頃には山脈の雪稜も漸くその鋭さを失ひ、穏かな丸味を帯びて來るのである。そして街の中は、堅く凍つた根雪が解けて、膚温い風のそよ吹く日すらしばしば訪れて來るのである。札幌では、毎年、そういふ二月の終りの暖い日に、肇めて、のどかな金魚賣の聲が、朗かに響き渡るのを聴くのである。その金魚賣の聲をきいて、人々は、明るく微笑みながら目映しさうに蒼空を見上げ、春の近きを識るのである。その長く語尾を引く金魚賣の聲は、一つの地方的な季節の調である。ほたほたと軒を傳ふ雪解の水の音と、のどかな諧調をなして響くその調をきくと、人々は、春の渡鳥が訪

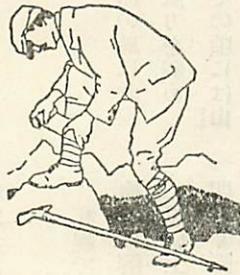
れてくるはるか以前に、春を豫感するのである。かくて雪に埋れた北の國にも季節は間斷なく移り廻り、凍つた二月の空も漸く解けて、雪解の早春となるのである。そして、春は素足で雪解の上を歩いてくるのである。

×

札幌であれば、例年三四尺積つた根雪は、二月の末から徐々に解け始めて、三月の終り頃には、四五ヶ月振で肇めて黒い土が現れてくるのである。その頃には、楡の芽立も明るく膨らみ、季節の風がその尖端に光り、ケンタツキープリユールグラスは既に青緑く無限の耐久力を發揮し、子供らは一勢にスキーを捨ててその懐しい土の上に轉り戯れるのである。敏感な彼らの心臓は、風の撒いた無色の春の撈埃に、誰よりも早く感應へ、雪の下既に早く用意された草木の花芽を嗅ぐのである。

四月、雪解の札幌は、恐らく一年中で最も悪い時節である。雪解の街は泥濘と化し、未だ吹く風は寒く、時には後衛的な吹雪も訪れ、いつたいに酷く家屋の素末な街並は、まことに索漠たるものである。しかしながら少しく街を離れて郊外に歩を運ぶと、そこにはまた力強い春の象徴が私

達の眼を索くであらう。それは、残雪の間にところと
霧れてゐる少しく、すんだやうな黒い土の色である。それは
全く北海道に特有な土の色なのである。未だ平原を吹く風
は寒く、近くの山脈ヤマなにも残雪が光つてゐる時分であるの
に、その土の色ばかりは、長い間深い雪にやさしく育まれ
て来たやうな柔い感じがする。人々は、その、濕り氣をも
ちながら、なほ無限の温味ぬくみをこめた土の色を通して、儼勃



として迫つてくる春を感じるであらう。そして小兒のやう
に何かしら心の高ぶるのを感じるであらう。元來私は、根
雪になる前の十一月頃と、緑の芽揃はない四月の頃を、季
節的には餘り好まないものである。しかし私は、嘗て、あ
の穏和な京濱の郊外の、麥の青さに感じたよりも、もつと
力強い春を、この雪解の頃の北海道の土に感じるのである。

— 一九一九・二・一八 —

夏スキーのサイズに就て

今年は思ひ切つて、短い夏スキーを作つて見やうと思ひ知り合ひの店に頼んだら、そんな小さな夏スキーは、未だ嘗て作つた事が無い。何かの間違ひでは無いかと逆ねぢを喰はされた程でしたが、まあよいから作つて呉れと云つて作らせましたが、寧ろ成功に近いものでした。つまりぬものですが御参考の爲めに左に寸法を掲げ夫に就て少し書いて見たいと思ひます。

長さ 一〇〇糎

巾 中央七糎 先端 八・三糎、後端七・三糎

厚さ 中央二糎 先曲部〇・八糎、後端〇・七糎

重量 一・五疋(兩方にて) 材種トネリコ

先づ夏スキーは長さを減じ軽くすると云ふ事と、スキーテクニクに、充分な長さとの兩者の折衝點を見出す事が

仲々困難な事であつた。即ち兩者は常に相反した要求をもたらすから。

第一に長さに就てであるが、長さはリックサツクの上に横に結束して取付けて長距離の間、谷・尾根と遍歴して歩くので此の長さを以て、携帶の便を顧慮しての限度とした此であれば殆んど、兩杖の長さよりも短く、ピツケルの長さに大体近いので、晩春より初夏に亘つて尙雪を貯へて居る高山岳に旅する際に汽車、電車、自動車の乗降の際非常に手軽く便利であつた。

又自分の身長は一五五糎であつて、此のスキーを用ひて五月の日本アルプス地方の、雪溪に於て充分スキーの快味に觸れる事が出来た、只初夏の雪溪は風の作用と雪崩のデブリーの爲めに可なりの凹凸があるので、短いスキーの欠

點たる衝動が激しく來る事は否まれない事實であつた。併し之れとても屈身姿勢になる事に依つて充分避け得られるものであつた。複雑なる地勢、急峻なる尾根等に於ては長いスキーの到底得られざる意想外の過少の勢力で有効な結果を得られるものだつた。登りは殆んど、過半は開脚を用ひ得るし初夏の朝午前九時頃よりは時々膝まで没する舊雪に對しても、此の短いスキーで充分である。

此の様な長さのスキーに於てはテレマルククターンは殆んど望み難く、其の代りにあらゆる場合に於て、ステームクリスチニアターンが重要な用途をなし、又夫が非常に易々と如何なる斜面にても行ひ得るものであつた。

併しスキーの滑度に關しては遺憾乍ら長いスキーに、一步を譲らねばならぬ。

只非常な急斜面の危険な場所に於ては、下降の際、キックターンの時に安定度が、どうも長いスキーに及ばぬ様だ次に巾に關しては、從來のものよりも約一糎を減じた。

之れは晩春、初夏の幾回も練結と、融解を繰り返した、雪は對壓力強く此れ丈けの長さで巾とを有する底面積にて、充分百二、三拾封度の人が一〇疋以上のリックを負つた重

みに堪へ得るものである。

それから底面の溝は一本の浅いもので充分であると思ふ二本は不要で、又あつた所で硬雪の上では、大した役にも立たぬ代りに、微妙なテヒニクを妨げる程のものでも無いが、自分は一本のものと二本のものを兩方履いて見たが一本のもので充分だと思つた、直滑降の際の方向のフレを防ぐためならば敢へて二本はなくとも、よいと思ふ。

更に、厚さ、肉の付け方に關しては、要するに普通のスキーを其のまゝ縮少したものよりも、長さの割合に分厚に作つた方が善からうが、よく夏スキーに見る如くビンデンの直下の肉の厚みと、後端の厚みが殆んど大差なく反りが、ずつと後方にあるものは何だかりヂッドな觸感が滑走の際、足に來て履き心地がよくない。其れに比すると後端を適當に薄くしたものはフレキシブルで、滑走感がよい。

短いスキーだけに、重いトネリコ材を用ひたけれども、全重量は少で、ビンドウングを附した兩方一足の重さが約一・五疋(約四百匁)となり之れに兩杖を、付けても格別の負擔を増さない。ケヤキ、カンバ、イタヤ等よりも重い欠點はあるが、吸濕性少く、之れに亞麻仁油を滲透せしめて

おいて乾し、使用の際は下降に先だち濕潤舊雪の時はワックスを塗れば充分と思ふ。朝夕の凍雪の際は全々ワックスの考慮は不要と見て差支へない。

朝早くヒユツテを出づる頃は雪が氷結して居るのでスキーを履かずに、此の軽い夏スキーをリツクサツクの上部に結はへて、アイゼンで、登つた方が遙かに時間、努力共經濟的で一時間の所を四十分位で登れる。午前九時頃以後になつて、雪が軟くなつて足が没して困る様になつて尙急峻

な雪面を、登らねばならぬ様な時には前後二個所許りスキーに繩を巻く方が、アザラシの皮を用ふるよりも簡便であると思ふ。一米許りの短いスキーに特別、アザラシ皮を造る必要も無いと思ふ。

又夏スキーは初夏登山の一つのミツテルとして用ひらるべきであつて、登山に關しては附帶的條件の一に數へらるるに過ぎない。

×

×

×

×

中山峠 スキー小屋

井 出 生

居る。今見捨て、来た脇方の部落には燈がちらついて来た。六時である。向ふから馬橋を急がせて来た親爺さんが、「近頃黒橋まで一人通らないから道もない暗くなると難儀するから引返して脇方に泊る様に」と切に忠告して呉れる。

燈の入った部落は暖かそうであるが、一杯のそばも口に入らなかつた部落へ歸つて宿をさがす面倒臭さに一行は、親切を謝して、「良く見當をつけて行きなされ」の言葉を後にしたのである。

雪の夜道は全く稀妙なものである。一寸した凹地が深い谷の様に見える。下滑は全くエレベーターに乗つた様な氣持である。

晝ならば二時間半で充分であらうと思れる行程を四時間もかゝつて黒橋に着たのである。黒橋驛邊、三上氏の門を叩いたのは午後十時であつたが親切な氏の一家は深夜突然の侵入者である我々を心良く招じて呉れたのである。

朝見ると昨夜斷崖を下りる様な氣持のした下滑路も眞白な二十度位の傾斜を持つた良いグレンデである。スキー小屋の管理をして居る氏は杖一本持つて一行と一緒に八

一行六人の話がまとまつて、札幌驛を立つたのが四月二日の午前拾時の上り列車である。先遊者の紀行文を見て漫然と汽車に乗り込んだ一行は、函館本線を俱知安で棄て、京極線に乗換へ、京極から此の二月に開通したといふ喜茂別線へ移り喜茂別からスキーで中山へ向ふ豫定で札幌より喜茂別までの切札を持つて居たのである。所が愈々俱知安で京極線に乗換へて地圖を見ると喜茂別本村といふのがあつて其處から二里程先に喜茂別村といふのがある。汽車が喜茂別村まで行つて居るのなら文句はないが、喜茂別本村までだとすると、豫定を更へて、京極線の終點脇方まで行つた方が都合が良さそうである。で車掌に尋ねて見ると、「もう開通したのか？何處まで行つて居

るのか知らない」といふ甚だ心細い答である。て一行は豫定を變へて、午後五時脇方驛へ下りたのである。深く切れ込だ幾條もの皺が洞の様に暗く深く見える黄昏れの羊蹄山を見た時は無精に腹が空いて来た。が文字通りの寒村である。物を齧ぐ家とても驛前に唯一軒破れ障子に、きそばと書き、物品販賣業の看板を掲げた家しかない。無精に空つた腹をかゝへて入ると今時客がないから駄菓子しか出ないそうである。そばが食へると思つて入つた一行は不満足ながら持參のパンと駄菓子で腹を欺満して、喜茂別川の流域にある黒橋まで續く駄々廣い高地へ出る。

長くなりかけた北海道の薄明は未だ羊蹄山の頂を紅に、ニセコアの彼方に漂つて

時に出發する、此處から小屋までは喜茂別川の本流をしばらく逆上つて右から入つてくる三番目の支流を上り盡せば良いのである。

途中所々で良いグレンデを見付て稀らしい粉雪を樂んで居た一行より先に小屋についた三上のおぢさんはストーブに火をつけて我々を待つて居て呉れた。黒橋から小屋まで我々は四時間かゝつたのである。

その夜は熊を十頭倒した經驗を持つて居るといふ三上さんの自慢話に更けたのである。三上さんは初老の好人物である。軍務に従つた事があると云つて居た。それで氣嫌の良い時はラツバの調子を吟じて薪の用意を良くして呉れた。スキヤ小屋の四日間我々に少しも薪の不自由をさせなかつた氏の親切は未だに身にしみて居るのである。

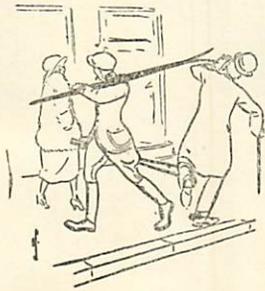
小屋附近は柔く悠然と展開された良い景色を持つて居る所謂メンデルングに好適である。特に峠附近は良い。幸ひにも我々は札幌岳、空沼、狭薄、漁等連登する素晴らしい眺望を其處で得たので特に峠の印象が深いのである。(此處まで書て來たら急に雨

が降り出しさうになつたから簡單に結末を急ぐものである。といふのは筆者は今日燦然たる五月の陽光に机を南庭のポプラの嫩芽の陰に持出して日の西に移ると共に、机を東に移動しつゝ拙い筆を運んで來たのである。太陽の運行は緩い様で早い、臚な記憶は途切勝である。机は既にポプラの廻りを四〇度移動して遂に雨が降つて來さうになつて來たのである)

小屋四泊の後吾々は無意根山より定山溪を経て札幌への歸路へ朝の五時に小屋を出たのである。

小屋より喜茂別川へ降り、其處から喜茂岳の南方にある九六四米の中腹を廻つて喜茂頂上へ八時到着、それからナミカワヌプリの腹を廻つて、無意根の一四〇〇米あたりまで着いたが強風の爲頂上斷念、白水川に添つて下り午後三時定山溪に着たのである。白水川の降は嬉しいものである。白水川の北にある小川といふのに添つて下りた方が面白いさうである。

(一九二九・五・十七)



編輯後記

◇本號發行も亦非常に遅れてしまひました事を深く御詫
び致します。

◇躍進!! 有能!! 多事であつた今冬を回顧して必ずや
私達は其處に幾多の尊い收穫を見出す事と思ひます。
獨習の殻を破つて、確實な道に躍進した本邦スキー界
の完全な發達と、スキータクニックの普及の爲に、
皆様のその尊い收穫、体験、研究の御發表を待望致し
ます。

◇亦、山々への紀行、研究を寄せられん事を廣く江湖上
に御願ひ致します。

◇原稿用紙は御申越次第御送り致します。

岡村源太郎遺稿集

スキーデイズタンスレース

完成
限定五〇〇部

体裁

菊判 三三〇頁 假製綴

紙質

上質紙 寫真版六葉

實價

金貳圓

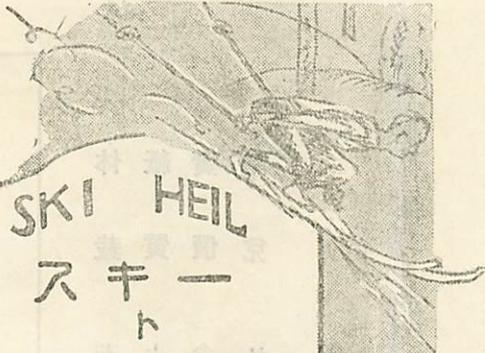
發兌

札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稻穂町梅屋運動具店宛に願ひ申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキー
ト
其用與全般

中野商店

スキー印パソ

第一 数量
第一 数量

札幌



國村商店大旗

山スキーの會

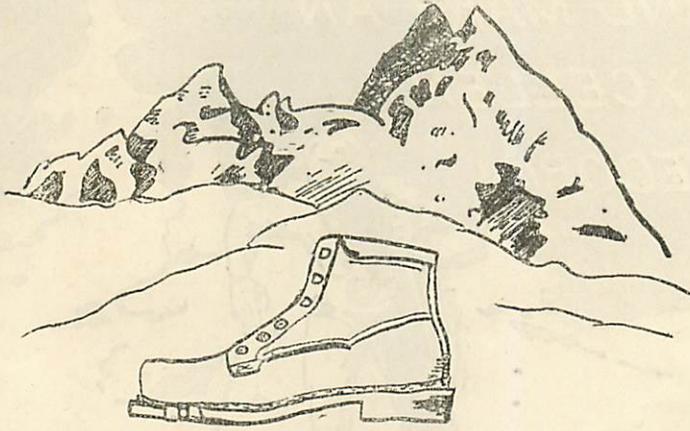
GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小
 店 具 動 運 屋 梅

北海帝國大學キス一部及同岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一條十街

木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願ひします、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和四年四月廿八日印刷

昭和四年五月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 92. majo 1929. Sapporo. Jpanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和四年四月二十八日印刷
昭和四年五月一日發行

—メタに比類なき—
冬期登山・家庭・旅行に
携帯便利・安全燃料
『METAメタ』

50錠入一函 ¥ .80

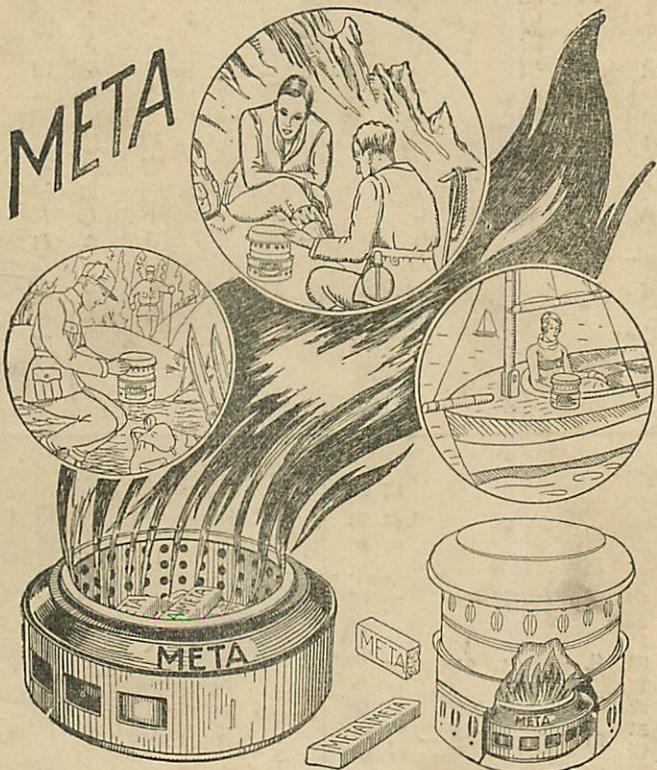
メタ、コツヘル・アブラート (アルミ製炊事具の類)

No. 80 (2pints)	¥ 4.50	No. 90 (フライパン)	¥ 1.50
MARIO (1½")	¥ 3.00	No. 50 (META-BURNER)	¥ 1.65
No. 70	¥ 2.50		

北海道地方

梅屋運動具店・富貴堂・小谷運動具店
今井吳服店・川口屋銃砲店運動具部

品切れの節は
直接美滿津へ



全國運動具店にあり・メタに比類なし

山とスキー 第九十二號 (倍大號) 本號に限り 定價金六拾錢

瑞國「メタ」安全燃料 及びアルミ容器 日本運動具店總代理店

美滿津商店

東京 本郷 赤門前 振替口座 (東京) 760
電話 豊 (小石川) 845